

國學院大學學術情報リポジトリ

Ancestor "祖 Oya" Worship and Genealogy in Ancient Japan : From View Point of Archeological Materials, Landscape of Settlement and Old Tombs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹生, 衛 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001697

「祖・おや」の信仰と系譜

―考古資料と集落・墓域の景観から見た古代の祖先祭祀―

笹生 衛

一、はじめに

初秋の夕暮れ、家々で迎え火を焚き祖先の霊を迎え、季節の野菜や御馳走でもてなす「お盆」の行事。社会構造が変化し、多くの伝統行事が消えつつある現代社会においても廃れずに続けられている行事の一つである。これは、日本人にとって祖先への信仰が現代でも大きな意味を持っていることを物語る。家族のあり方が急速に変化しつつある現在、それを結びつけてきた祖先への信仰とその歴史を再確認することは有意義な作業と思われる。

「春は(山から)降り冬は(山へ)昇りたまふ」という百姓の守護者が、遠い大昔の共同の先祖¹であったとする柳田国男の『先祖の話』¹を始めとして、祖先への信仰・祭祀については、これまでに多岐にわたる研究が行われており、その全体を俯瞰し問題点を抽出するのは容易でない。そこで、ここでは、近年、新たな資料を加えつつある考古学の視

点から、古代、特に古墳時代を中心に祖先観とその祭祀について考えてみたい。古墳時代は、後の神道信仰に直接つながる神観や祭祀形態の原形が形成された時代であり、^②そこでの祖先観は『記紀』や神道における祖先(氏神)信仰の問題に直結するからである。これを考える場合、古墳と祖先・死者の考え方、靈魂観とは、どのように関係したのか
 が大きな問題となる。

古墳と祖先祭祀の関係を取り上げた初期の研究には、大場磐雄の研究がある。大場は、神社と古墳の立地関係をもとに古墳の墓前祭祀から氏神祭祀へ発展する流れを指摘した。^③次いで、近藤義郎が弥生墳丘・台状墓から前方後円墳への変遷の中で、祖霊信仰を取り上げ、その後の古墳研究に大きな影響を与えている。近藤は、前方後円墳への埋葬は、亡き首長が祖霊から引き継いだ靈力を後継者にひき継ぐ祭式とし、前方後円墳は首長靈継承の場、亡き首長を祖霊に加え、その靈威が集団に回帰することを願う祖先祭祀の場とする。さらに、その祭祀の新嘗祭との類似性も指摘する。^④これを受けて広瀬和雄は、前方後円墳は各地域の葬制を統合して中国の天円地方の思想を付加したもので、葬られた亡き首長は、共同体の安寧と繁栄のために働く「カミ」として再生するという共同観念の存在を想定した。^⑤

古墳における祭祀の性格に関しては、出土した石製模造品の分析から、梶山林継と白石太一郎が言及している。梶山は古墳と祭祀遺跡で出土する石製模造品の種類の差から五世紀を境とする祭と葬の分離を指摘した。^⑥これに対し白石は、副葬品に農工具類が含まれる点から古墳の被葬者に農耕儀礼の司祭者としての性格を想定し、古墳祭祀は亡き司祭者に対する祭祀で、あくまでも神祭りとは別系統であるとする。^⑦

古墳の埋葬形態に着目した靈魂観や他界観の推定も行われている。他界観に関しては、まず、横穴式石室と黄泉の国説話との結び付きを指摘した、小林行雄・白石太一郎の研究があげられる。^⑧『記紀』神話と、五世紀後半以降普及する古墳の横穴式石室との対応関係を確認し、黄泉の国説話が形成される年代や歴史的背景を示唆する。また、近藤

義郎は、横穴式石室への須恵器・土師器の副葬から、死後も古墳(石室)内で生活する家族霊の成立を考えており、^⑨ 瀬和雄も、遺体が密閉・辟邪される竪穴式石室とは対照的に横穴式石室では須恵器等の食器類が持ち込まれ、死者の霊魂は肉体と分離し石室内で生活するという、東アジアの霊魂観が導入されたとする。^⑩

その一方で、辰巳和弘は、船形埴輪や古墳壁画の船のモチーフ、船葬・船形棺の存在から、死者の霊魂が船で他界(古墳墳丘)に運ばれるという霊魂観の存在を指摘し、^⑪ 白石太一郎は、九州の装飾古墳に見られる船のモチーフから常世など海上他界観を想定する。^⑫ また、生土田純之は、墳丘に立てられた木柱や鳥形木製品の出土に注目し、死者霊は天空を飛翔する存在とし、それは弥生時代以来の霊魂観であったとする。^⑬

近年では、古墳の墳頂や墳丘のみでなく、周溝から周辺部にかけての詳細な発掘調査の結果、古墳全体における祭祀・儀礼の実態を示す資料が増加している。五世紀初頭の奈良県巢山古墳では周溝内の出島状遺構とそこにおける埴輪配列が判明し、^⑭ 導水祭祀や常世信仰との関連性が考えられており、同時期の兵庫県行者塚古墳では、造り出しにおける土製品や埴輪の細かな配置状況などから飲食供献を含む祭祀・儀礼の存在が想定されている。^⑮ さらに、群馬県保渡田八幡山古墳など、五世紀後半から六世紀にかけて展開する多様な形象埴輪の配列について、^⑯ 殯などの葬送儀礼や首長権継承儀礼との関連が考えられている。^⑰

以上、古墳における祖霊・霊魂観、他界観、それに伴う祭祀・儀礼に関する主な研究を見てきた。そこでは、古墳を祭祀・儀礼の場とする点は共通するものの、被葬者の性格を「祖霊」「カミ」とする一方で「農耕儀礼の司祭者」とする見解があり、死者・被葬者の霊魂は、辟邪され古墳や石室内に留まるとするものと、海上や天空などの他界に赴くという全く対照的な内容が示されている。古墳の祖霊・霊魂観や他界観を考古学的に見た場合、多様な見解が同時に展開しているのが現状と言えよう。このように、古墳被葬者の性格や霊魂観が多様である原因の一つは、各論者が

設定する「神」・「カミ」・「祖霊」・「死者霊」・「靈魂」・「司祭者」などの意味・定義が一定していないことにあると思われる。これを解決するには、古墳時代の直後、八世紀前半に編纂された『記紀』や『風土記』で、祖先を示す言葉として使用される「祖(おや)」が、古墳被葬者の性格、祭祀・儀礼とどのように関連するかを検証することが有効と考える。

また、従来の研究が古墳のみを分析対象としており、古墳と同時代の集落との位置関係から、生者は死者とどのような位置関係で生活していたのか、それが年代的にどう変遷したかという視点での分析は殆ど行われていない。特に、古墳時代から奈良・平安時代への移行状況の分析は、『記紀』や『風土記』に見られる「祖」を考える上で重要な視点になると思われる。

そこで本稿では、まず古代における「祖」の主な用例を、『記紀』と『風土記』で概観した後に、その最も古い例である埼玉県稲荷山古墳出土鉄剣銘の「上祖」と比較検討し、古墳時代における「祖」の信仰と祭祀について考える。次いで、千葉県千葉市「おゆみ野地区」遺跡群の発掘調査成果にもとづき、古墳群と集落遺跡の位置関係と変遷を分析し、古代東国の人々が、死者とどのように接してきたかを、景観の視点から推定する。これらの結果を受けて、古墳時代の祖先への信仰と祭祀の性格、さらに古代の文献史料に見える「祖」の信仰との関連について考えてみたい。

二、「祖」の用例

祖先を示す「祖」の文字は、多くの文献史料で確認できるが、古墳時代と最も近い八世紀前半の『記紀』と『風土記』の記述から主な用例を見てみよう。

◎『古事記』¹⁷⁾

- ・「綿津見神は、阿曇連等の祖神と以ち伊都久神なり」上巻
- ・「天菩比命の子、建比良鳥命、（此は出雲國造、无邪志國造、上菟上國造、下菟上國造、伊自牟國造、津嶋縣直、遠江國造等が祖なり。）」上巻

・「此の意富多多泥古命は、神君、鴨君の祖。」中巻

- ・「其の三はしらの弟を殺さむとして謀る間に、其の御祖伊須氣余理比賣、患ひ苦しみて、歌を以ちて其の御子等に知らしめたまひき。」中巻

・「其の母に白しし時、御祖答へて曰ひけらく、（中略）其の兄の患ひ泣きて、其の御祖に請へば」中巻

『古事記』においては、基本的に「祖」の文字のみが使用され、祖先を示すほか、神の文字を付けて祖先神とする。

その一方で、直接の母親に対しても「御祖」の文字が使用されており、「神産巢日御祖命」とされる「神産巢日神」には、母性的な神格がうかがえる。

◎『日本書紀』¹⁸⁾

・「次に草の祖草野姫を生む。」巻一第五段本書

- ・「復劔の刃より垂る血、是、天安河邊に所在る五百箇磐石と爲る。即ち此経津主神の祖なり。（中略）其の甕速日神は、是武甕槌神の祖なり。」巻一第五段一書第六

・「次に天穗日命。是出雲臣と土師連等が祖なり。」巻一第六段本文

・「火闌降命と號す。是隼人等が始祖なり。」火明命と號く。是尾張連等の始祖なり。」巻二第九段本文

- ・「故、天照大神、乃ち天津彦彦火瓊瓊杵尊に八坂瓊の曲玉及び八咫鏡・草薙劍、三種の寶物を賜ふ。又、中臣の上

祖天兒屋命・忌部の上祖太玉命・媛女の上祖鈿女命・鏡作の上祖石凝姥命・玉作の上祖玉屋命、凡て五部の神を以て、配へて侍らしむ。」卷二第九段一書第一

・「即ち紀國の忌部の遠祖手置帆負神を以て、定めて作笠者とす。」卷二第九段一書第二

・「大伴連の遠祖天忍日命、来目部の遠祖天穗津大来目を帥ゐて、」卷二第九段一書第四

・「其れ火闌降命は、即ち吾田君小橋等が本祖なり。」卷二第十段本文

・「昔我が天神、高御産靈尊・大日靈尊、此の豊葦原瑞穗國を擧げて、我が天祖彦火瓊杵尊に授けたまへり。」神武天皇即位前紀

・「臣は是国神なり。名をば珍彦と曰す。(中略)此即ち倭直部が始祖なり。」神武天皇即位前紀

・「大伴氏の遠祖道臣命」神武天皇元年正月

・「我が皇祖の靈、天より降り鑒て、朕が躬を光し助けたまへり。(中略)用て皇祖天神を祭りたまふ。」神武天皇四年二月

・「兄大彦命は、阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狭狭城山君・筑紫國造・越國造・伊賀臣、凡て七族の始祖なり。」孝元天皇七年二月

・「穗積臣の遠祖大水口宿禰」崇神天皇七年八月

・「所謂大田田根子は、今の三輪君等が始祖なり。」崇神天皇八年十二月

・「豊城命を以て東を治めしむ。是上毛野君・下毛野君の始祖なり。」崇神天皇四十八年四月

・「矢田部造の遠祖武諸隅」出雲臣の遠祖出雲振根」崇神天皇六十年七月

・「三輪君の祖大友主と、倭直の祖長尾市とを播磨に遣して」垂仁天皇三年三月

・「中臣連の祖探湯主」垂仁天皇二十五年三月
 ・「根鳥皇子は、是大田君の始祖なり。大山守皇子は、是土形君・榛原君、凡て二族の始祖なり。去来眞稚皇子は、是深河別の始祖なり。」応神天皇二年三月

・「其の屯田司出雲臣の祖淤宇宿禰に謂りて曰はく、「仁徳天皇即位前紀

・「大王、皇祖の宗廟を奉けたまふこと、最も宜稱へり」允恭天皇即位前紀

・「漢織・呉織の衣縫は、是飛鳥衣縫部・伊勢衣縫が先なり。」雄略天皇十三年三月

・「山部連の先祖伊豫来目部小楯」清寧天皇二年十一月

・「遂に子有りて、法師君と曰ふ。是れ倭君の先なり。」武烈天皇七年二月

『日本書紀』では、祖神と祖先の両方を指す「祖」の他、『古事記』とは対照的に「皇祖・天祖・上祖・本祖・遠祖・始祖・先・先祖」といった多様な文字が使用されている。皇祖は天皇家の祖先一般をさし、天祖は祖先神と神武天皇の中間の祖先、彦火瓊瓊杵尊に対して使われる。天神と対になる使用例、「皇祖の霊」の表現も確認でき、祭祀対象となっている。上祖は、天孫降臨を物語る巻二第九段一書第一に限られ、天孫に従う中央氏族の祖先神に対して集中して使用されるのに対し、祖・遠祖・始祖・本祖は、中央豪族から地方豪族まで祖先を示す語として広く使用されている。ただし、先・先祖の用例は、雄略紀以降で使用される傾向がある。

また、中臣(連)・三輪君(大三輪君・神君)・出雲臣には、上祖・始祖・遠祖とは別の人物を祖とする記述があり、系譜の起点を「上祖・始祖・遠祖」、系譜上の人物を「祖」と称している。なお、大伴連は複数の遠祖が存在する。さらに、「此れ大三輪の神なり。此の神の子は、即ち甘茂君等・大三輪君等、又姫踏躰五十鈴姫なり。」(『日本書紀』

卷第一第八段一書第六)とあり、祖(祖先)に対する、子(子孫)の観念も認められる。

これら『記紀』における「祖」の用例について、本居宣長は、『古事記伝六之卷』で次のような考えを示している。祖神は意夜賀微と訓べし、凡て上ツ代は、父母に限らず、幾代にても、遠祖までを通はして、皆ただ意夜と云り、【其證は古書にあまた見ゆ、父母は其ノ意夜の中の一せなるが、有ルが中に近く親き故に、殊に其稱を専と負て、後には意夜といへば、ただその父母のみの稱の如くなれりしなり、後ノ世のならひを以テ古へをな疑ひそ、】故レ古書には祖ノ字を意夜と訓て、親のことにも用ひたり、(中略)書記には遠祖上祖本祖始祖などと書て、登富都意夜と訓メリ、是レも古稱にて、万葉集【十八】にも遠都神祖などあり、されど此記(古事記)には、何れも祖とのみありて、遠祖など書ること一ツも無れば、ただ意夜と訓ム例なり、されば上代には、某姓の本祖と云をも、ただ祖とこそ云けむ、又子と云も、己が生るに限らず、子々孫々までかけて云稱なり、(後略)¹⁹⁾

「祖」は「意夜(おや)」と読み、自らの親以前の祖先全般に用いたとし、『日本書紀』の「遠祖・上祖・本祖・始祖(とほつおや)」よりも、『古事記』の「祖(おや)」一字の用例が本来的であるとする。さらに、祖(おや)は子(こ)と対の関係であることも指摘する。

また、『日本書紀』における「祖」の用例は、田中久夫が集成・分析しており、「祖」に対する考え方は雄略天皇の第十四卷から史実としての色彩を帯びてくる」と指摘すると同時に、祖や系譜觀念と帰化人(渡来人)との密接な関連を強調している。²⁰⁾

次に、『記紀』と同時代に地方で編纂された『風土記』の「祖」の用例を、前後の文脈を含め見てみよう。²¹⁾

◎『常陸国風土記』

- ・「昔、神祖の尊、諸神たちのみ處に巡り行でまして、」筑波郡
- ・「茨城の國造の初祖、多祁許呂命は息長帶比賣の天皇の朝に仕へて、品太の天皇の誕れましし時までに至れり。多

祁許呂命は子八人あり。中の男、筑波使主は、茨城の郡の湯坐連等が初祖なり。」茨城郡

・「斯貴の瑞垣の宮に大八洲所馭しめしし天皇のみ世、東の垂の荒ぶる賊を平けむとして、健借間命を遣しき。(即、此は那珂の國造の初祖なり。)」行方郡

・「天地の草昧より已前、諸祖天神(俗、賀味留彌・賀味留岐といふ)、八百万の神たちを高天の原に會集へたまひし時、諸祖神、告りたまひしく、「今、我が御孫の命の光宅さむ豊葦原の水穂の國」とのりたまひき。」香島郡

◎『播磨国風土記』

・「昔、大帶日子の命、印南の別嬢を誂ひたまひしに、(中略)賀毛の郡の山直等の始祖息長命(一の名は伊志治なり。)を媒と為て、(中略)以後、別嬢の床掃へ仕へ奉れる出雲臣比須良比賣を息長命に給ぎたまひき。墓は賀古の驛の西にあり。」

・「昔、大部造等が始祖、古理賣、この野を耕して多に粟を種けり。」以上、賀古郡

・「瓶落と號ける所以は、難波の高津の御宮の天皇の御世、私部の弓取等が遠祖、他田の熊千、瓶の酒を馬の尻に着けて、家地を求ぎ行きしに、其の瓶、此の村に落ちき。故、瓶落といふ。」

・「志我の高穴穗宮に御宇しめしし天皇の御世、丸部臣等が始祖比古汝茅を遣りて、國の境を定めしめたまひき。」以上、印南郡

・「(志貴の)嶋の宮に御宇しめしし天皇の御世、村上足嶋等が上祖惠多、この野を請ひて居みき。」

・「韓室と稱ふは、韓室首寶等が上祖、家大く富み饒ひて、韓室を造りき。」

・「草上といふ所以は、韓人山村等が上祖、柞の巨智の賀那、此の地を請ひて田を墾りし時、」

・「(志貴の)嶋の宮に御宇しめしし天皇のみ世、私部の弓束等が祖、田又利君鼻留、此の處を請ひて居りき。」

- 「大長谷の天皇の御世、尾治連等が上祖長日子、善き婢と馬とを有たりき。(中略)ここに、長日子、死せなむとする時、其の子に謂りていひしく、「吾が死せなむ以後は、皆、葬りは吾に准へ」といひき。即ち、これが爲に墓を作りき。第一は長日子の墓と爲し、第二は婢の墓と爲し、第三は馬の墓と爲しき。併せて三つあり。後、生石の大、國司たりし時に至り、墓の邊の池を築きき。故、因りて名を馬墓の池と爲す。」以上、飾磨郡
- 「衣縫の猪手・漢人の刀良等の祖、此處に居らむとして、社を山本に立てて敬ひ祭りき。」
- 「宇治の天皇のみ世、宇治連等が遠祖、兄太加奈志・弟太加奈志の二人、大田村の与富等の地を請ひて、田を墾りて蒔ゑむとして来たりし時に、」以上、揖保郡

◎ 『出雲国風土記』

- 「舍人の郷、(中略)志貴島の宮に御宇しめしし天皇の御世、倉の舍人君等が祖、日置臣志毘、大舍人供奉りき。即ち是は志毘が居める所なり。」
- 「新造院一所(中略)嚴堂を建立つ。僧なし。日置臣目烈が造るところなり。出雲の神戸の日置君猪麻呂が祖なり。」以上、意宇郡
- 「御祖、神魂命の御子、支佐加比賣命」嶋根郡
- 「即ち、彫り鑿てる磐壁三所あり。(中略)其の中に川を通し、北に流れて大海に入る。(中略)嶋根の郡の大領社部臣訓麻呂が祖波蘇等、稲田の澗に依りて、彫り掘りしなり。」秋鹿郡
- 「阿遲須枳高日子命の後、天御梶日女命、多久の村に來まして多伎都比古命を産み給ひき。その時、教し詔りたまひしく、「汝が命の御祖の向壯に生まむと欲ほすに、此處ぞ宜き」とのりたまひき。」楯縫郡
- 「大神大穴持命の御子、阿遲須枳高日子命、御須髮八握に生ふるまで、夜晝哭きまして、み辭通はざりき。その時、

御祖の命、御子を船に乗せて、八十嶋を率て巡りてうらかし給へども、猶哭き止まざりき。」仁多郡
 ・「宇能治比古命、御祖須美禰命を恨みまして、北の方、出雲の海の潮を押し上げて、御祖の神を漂はすに、此の海潮至れき。」大原郡

◎『豊後国風土記』

・「纏向の日代の宮に御宇しめしし大足彦の天皇、豊國直等が祖、菟名手に詔したまひて、豊國を治めしめたまひしに、」
 総論

・「磯城嶋の宮に御宇しめしし天國排開廣庭の天皇のみ世、日下部君等の祖、邑阿自、鞆部に仕え奉りき。其の邑阿自、此の村に就きて、宅を造りて居りき。斯に因りて名を鞆負の村といひき。」日田郡

◎『肥前国風土記』

・「磯城の瑞籬の宮に御宇しめしし御間城の天皇のみ世、肥後の国益城の郡の朝來來名の峯に、土蜘蛛、打猴・頸猴二人あり、(中略)皇命に拒捍ひて、降服ひ肯へざりき。朝廷、勅して、(中略)肥君等が祖、健緒組を遣りて、伐たしめたまひき。」総論

・「此の川上に荒ぶる神ありて、往来の人、半を生かし、半を殺しき。ここに縣主等の祖大荒田占問ひき。」小城郡
 ・「此の里に土蜘蛛あり、名を海松樞媛といひき。纏向の日代の宮に御宇しめしし天皇、國巡りましし時、陪従、大屋田子(日下部君等の祖なり)を遣りて、誅ひ滅ぼさしめたまひき。」松浦郡

・「纏向の日代の宮に御宇しめしし天皇、行幸しし時、此の里に土蜘蛛三人ありき。(中略)その時、陪従、紀直等の祖釋日子を遣りて、誅ひ滅さしめたまはむとしき。」彼杵郡

以上、現存する古代の風土記の用例を見てきたが、多く「祖」が使用される他に、「上祖」「初祖」「遠祖」「始祖」「神・

御祖」があり、東国の常陸国から九州の豊後・肥前国まで広範囲にわたって、祖先や親を指す言葉としての使用が確認できる。その特徴には、以下の点が指摘できる。

①「祖」「上祖」「遠祖」が、耕地の開墾・開墾、居住地の設定を行った人物として語られている。その用例は、『播磨国風土記』に多く認められるが、出雲・豊後でも確認でき、居住域(村・集落)と耕地(水田・畑)の景観は、「祖」「上祖」「遠祖」と称された祖先が作ったものという認識が、八世紀前半段階で広範囲に存在したと考えられる。

②「始祖」「上祖」が葬られた墓が伝承され、八世紀前半段階でも、その墓が特定されている。『播磨国風土記』にある、景行天皇の時代の人、山直等の始祖息長命の墓、雄略天皇の時代の人、尾治連等の上祖長日子の墓が、これに当たる。これらの墓は、年代的には古墳と考えるのが自然であり、「始祖」「上祖」は、古墳に葬られているという認識があったと見てよいだろう。

③「祖」は、祖先とともに親を指す言葉として使用され、そこには母のみでなく、父親や祖父が含まれる。この代表的な用例が「御祖」であり、『出雲国風土記』で顕著に認められる。また、『豊前・肥前国風土記』では、日下部君の祖として、景行天皇時代の大屋田子と、欽明天皇時代の邑阿自があり、本居宣長が指摘するような、遠い祖先から自らの親まで「祖」とする考え方が、八世紀段階で地方にも存在していたことが判明する。

④東国の『常陸国風土記』と九州の『肥前国風土記』では、大和王権に対抗する在地勢力(荒ぶる賊・土蜘蛛)を征する人物が、国造等の地方豪族の「祖」「初祖」として語られる。

「祖」は漢字であり、田中久夫が強調するように、その觀念の導入には大陸の思想が関与していたことは否定できない。しかし、風土記にみられるように、広範に類似した用例が存在するため、少なくとも八世紀前半までに、東国から九州にかけて「祖」の考え方が、広く浸透していたと考えざるを得ない。そして、「祖」は、集落や耕作地で構

成される、八世紀当時の地域の景観を作った人物であり、その「祖」「上祖」を葬った墓(古墳)も意識されていたのである。これら『記紀』『風土記』に見られる多様な「祖」の用例の中でも、年代的には「上祖」が最も古く遡る。それを示すのが、埼玉県行田市埼玉古墳群の稲荷山古墳から出土した鉄剣の金象嵌銘である。

三、稲荷山古墳鉄剣銘の「上祖」

稲荷山古墳から出土した鉄剣には、「上祖」の文字を含む次の銘文が金象嵌で記されている。

表「辛亥年七月中記乎獲居臣上祖名意富比埜其兒多加利足尼其兒名弓已加利獲居其兒名多加披次獲居其兒名多沙鬼獲居其兒名半弓比」

裏「其兒名加差披余其兒名乎獲居臣世々為杖刀人首奉事来至今獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時吾左治天下令作此百練利刀記吾奉事根原也」

この銘文は、報告書で文字の解説が行われており、その要点は、①銘文の作成年は辛亥年、②意富比埜(オオヒコ)を上祖とする、乎獲居臣(ヲワケノオミ)まで八代に亘る系譜の存在、③ヲワケノオミの系譜は代々「杖刀人の首」として仕えたこと、④ヲワケノオミは、獲加多支鹵大王の時代に治天下を補佐し、百練の鉄刀を作り奉事の根源を記したこと、の四点にまとめられることができる²²⁾。

稲荷山古墳は、墳丘全長一二二mの前方後円墳で、西側括れ部に造り出しが付き、周囲に長方形の周溝が二重に巡る特異な形態である。造り出しから出土した須恵器にTK二三〇四七型式の蓋杯が含まれ、第一主体部出土の馬具がF字形鏡板を伴うため、古墳の築造は五世紀末期まで、第一主体部の埋葬は六世紀前半までと推定され、銘文が刻ま

れた辛酉年は、西暦四七一年を当てるのが通説である。²³つまり、「上祖」の用例は、日本列島では五世紀後半まで確実に遡ることになる。「上祖」の文字は、ヲワケノオミに至る八代の系譜の起点、オオヒコに対して使用されており、同時に、「上祖」の表現が、五世紀後半の時点で一定の系譜意識のもとで使用されていたことを示している。また、上祖オオヒコの次代からは、「其の児」で連続させて繋ぎ、本居宣長が指摘した「祖」と「子」の関係が認められる。

稲荷山古墳鉄剣銘の系譜に関して、義江明子は豎系図の海人部系図との比較検討から、親子関係ではなく地位継承次第を示し、「上祖」はその冒頭に置かれる古い表記であり、『日本書紀』編纂の頃に「始祖」「遠祖」に置き換えられたとする。²⁴この系譜が実際の血縁関係ではなく、地位継承次第を示すものだとしても、少なくとも、五世紀後半段階に八代にわたる系譜と、その冒頭に「上祖」を置く考え方が存在したことは間違いない。

系譜の末尾に当たるヲワケノオミと稲荷山古墳第一主体部の被葬者との関係は、いくつかの可能性が考えられる。しかし、自らの系譜とその由来を記した鉄剣を第三者に渡すことは不自然とすれば、第一主体部の被葬者とヲワケノオミは、同一人物か近親者と考えられる。²⁵そう考えると、東国の前方後円墳に葬られたヲワケノオミは、それが擬制的か否かは別として、オオヒコを上祖とする系譜を意識し、それに連なっていたことになる。

上祖オオヒコ(意富比埜)は、『日本書紀』崇神天皇十年九月に北陸道へと派遣された四道將軍の一人、大彦命と名前が一致し、上祖意富比埜は大彦命を指している可能性が高い。²⁶大彦命は、『日本書紀』孝元天皇七年二月条によると、第八代孝元天皇の第一子で、「兄大彦命は、阿倍臣・膳臣・阿閉臣・狹狭城山君・筑紫國造・越國造・伊賀臣、凡て七族の始祖なり」とあり、中央氏族から地方國造の祖先とされている。金象嵌銘鉄剣が出土した埼玉古墳群に対応する武蔵國造は、『古事記』では天菩比命の子、建比良鳥命を祖とするが、東国の豪族で武蔵に隣接する上毛野君は、崇神天皇の皇子、豊城命(豊城入彦命)を始祖としており、武蔵地域の豪族の祖先を、同じ皇族の大彦命とする系譜が

存在したとしても不自然ではない。

次に、この金象嵌銘鉄剣と共伴する副葬品の内容、出土した稻荷山古墳の古墳群全体での位置を細かく見ることで、そこに記された系譜や「上祖」の意味について考えてみよう。

副葬品の内容と性格 「上祖」の文字が刻まれた金象嵌銘鉄剣は、稻荷山古墳で検出された二つの主体部のうち、礫槲構造の第一主体部から出土しており、この鉄剣を含め、礫槲内からは次の遺物が出土している。

銅鏡(画文帯神獸鏡)一点、装身具(銀環二点、金銅帯金具一揃え、翡翠製勾玉一点)、

武器・武具類(直刀四点・剣二点・鉾二点、挂甲一領、鉄鎌四束約二〇〇本)、

工具類(刀子二点・鉄斧二点・鉄鉗一点・鉋一点・鑿子一点)、馬具一揃え、小刀一点、砥石一点

遺体頭部の下に置いたと推定される銅鏡、身につけていたと考えられる装身具と砥石の他、木棺の内外に武器・武具、工具、馬具が添えられている。鉄製の武器・武具と農・工具が遺体や棺に添えられる形は、古墳時代前期、四世紀後半から五世紀前半の古墳副葬品のあり方と共通し、稻荷山古墳の鉄製品の組成は、農具を欠くものの、これを踏襲するものであり、さらに五世紀後半以降の馬具が加わった形と見ることができ。

鉄製の武器(刀剣類・鏃)、農具(鋤・鎌・穂摘具等)、工具(斧・鉋・刀子等)は、五世紀中頃から後半にかけての祭祀遺跡においても中心的な供献品として扱われていたことが、祭祀遺物の分析から判明している。その典型的な例は、五世紀中頃の沖ノ島二一号祭祀遺跡であるが、同時代の東国でも確認できる。千葉県木更津市の千束台遺跡、茨城県稲敷市尾島貝塚祭祀遺構では鉄製の武器と農・工具に鉄鋌が加わっており、群馬県渋川市宮田諏訪原遺跡では甲(挂甲か)の小札が確認できる。²⁷⁾

この鉄製品の組成に、五世紀後半以降、祭祀遺跡においても馬具が加わる。五世紀後半から六世紀段階の沖ノ島七・

八号祭祀遺跡では、銅鏡と玉類、鉄製の刀剣、鉾、鏃、衝角付冑、挂甲、盾の武器・武具、実用の鑄造鉄斧と刀子の工具類、鉄製斧形・刀子形の雛形工具類に、金銅製馬具が加わっている。⁽²⁸⁾ 東国の同時代の祭祀の場でも馬具が確認できる例がある。千葉県成田市南羽鳥遺跡群、中岫第一遺跡F地点の祭祀遺構では、鉄鏃、鉄製鋤先・鏃、刀子、鉄製雛形の鎌形とともに、鉄製の轡が出土しており、馬具が伴っていたことが判明する。また、千葉県館山市の東田遺跡では人工的に開削された溝内に祭祀後に投棄されたと思われる鉄製鏃と多量の土製模造品が出土し、溝付近からは馬具のものと思われる金銅帯先金具が出土している。いずれも、土器類は六世紀後半から七世紀代のものを伴っており、六・七世紀、東国の祭祀の場においても馬具が神へ供献されていた可能性が高い。⁽²⁹⁾

結局、遺存状態の良好な祭祀遺構を見ると、五・六世紀代の祭祀遺跡の主要な供献品と、古墳の副葬品とは共通する部分が多く、金象嵌銘鉄剣とともに稲荷山古墳の礫槨に副葬された鉄製の武器・武具、工具、馬具は、祭祀の場で神霊へと捧げられた供献品「幣帛」と共通した機能、被葬者への供献品としての性格を推定できる。

造り出しの土器類 稲荷山古墳の西側括れ部には、造り出しが作られており、そこからは土師器壺・杯、須恵器高杯・杯・甗が出土しており、須恵器は陶器窯TK四七型式で五世紀後半から末期の年代が推定できる。この造り出し部分での儀礼内容を考える上で参考になるのが、兵庫県加古川市の行者塚古墳の例である。⁽³⁰⁾

行者塚古墳は、五世紀初頭頃の前方後円墳で、墳頂では埋葬施設の他、箱に納められた大量の鉄製品が出土した。内容は、武器(刀剣・矛・鏃)、農具(鋤先・鎌・穂摘具)、工具(斧・鑿・錐・鉈・刀子・鋸・鉄床)に鉄鋌が加わる。この組成は、五世紀中頃の祭祀遺跡で見られる鉄製品の品目と類似し、武器と工具に鍛冶用の工具を含む点は稲荷山古墳の副葬品と共通する。

この古墳は東西括れ部に各一カ所、後円部の北に二カ所、計四カ所に造り出しが作られており、西側括れ部の造り

出しでは、方形の埴輪列で囲まれた家形埴輪群と土製模造品が出土している。土製模造品は、その形状から魚・鳥・モチ・アケビ・ヒシの実などと考えられ、ミニチュアの高杯、笊形土器に盛られて供えられた状態を推定でき、西側括れ部の造り出しでは、飲食物を供献する儀礼を行っていたことは明らかである。稲荷山古墳西側括れ部の造り出しにおいても同様な儀礼を想定でき、出土した土師器壺・杯、須恵器高杯・杯・甕は、酒食を供献した儀礼に使用されたと考えてよいだろう。

稲荷山古墳と「祖」の祭祀 五世紀後半の稲荷山古墳を嚆矢として、七世紀前半頃の方墳、戸場口山古墳まで、東西約五〇〇m、南北八〇〇mの範囲に継続して大小四〇基以上の古墳が築かれ埼玉古墳群が形成されている。ここは、武蔵地域最大規模の古墳群であり、武蔵国造との関連を想定でき、古墳群内の南東部分に位置する円墳、浅間塚古墳上には延喜式内社の前玉神社が鎮座する。⁽³²⁾

前方後円墳に長方形の二重周溝が巡るといふ稲荷山古墳の特異な墳丘形態は、六世紀初頭の二子山古墳、六世紀前半の愛宕山古墳、六世紀前半から中頃にかけての瓦塚古墳、六世紀中頃の奥の山古墳、六世紀後半の將軍山古墳・鉄砲山古墳、六世紀末期から七世紀初頭頃の中の山古墳へと受け継がれている。特に、稲荷山古墳の系譜は、墳丘長が一〇〇mを超す二子山古墳(二三八m)、鉄砲山古墳(一〇九m)と受け継がれ、横穴式石室が確認できる將軍山古墳を経て最後の前方後円墳、中の山古墳に至り、最終的に一辺四〇mの方墳、戸場口山古墳に受け継がれ、埼玉古墳群は終焉を迎えたと考えられる。古墳群最終段階の七世紀代に機能していた、中の山古墳、戸場口山古墳に隣接して式内社の前玉神社が鎮座し、古墳群と神社との関連を示唆する。

このように、五世紀後半、稲荷山古墳の築造により、七世紀代まで続く埼玉古墳群の形成が始まっており、これは、稲荷山古墳の被葬者、ヲワケノオミもしくはその父を起点として、後に続く新たな系譜が成立したことを意味する。

そして、その起点となる稲荷山古墳に、上祖オオヒコ以来の系譜を刻んだ鉄剣が納められていた意味は大きい。鉄剣に記された上祖オオヒコ以来の系譜は、新たに成立した豪族の系譜に接続されてその歴史性を保証すると同時に、その後の古墳群の被葬者は、上祖オオヒコの系譜に連なると認識されたのである。古墳群の被葬者は、生前は上祖オオヒコの系譜に連なる「児・子」として生き、死後は一定の祭式に基づき古墳群に葬られ、上祖オオヒコ以来の「祖」の系譜に組み込まれたのである。この一定の祭式とは、埋葬施設における鉄製の武器・武具、農・工具、馬具など副葬品の供献であり、造り出し部分における酒食の供献儀礼であったと考えられる。そして、系譜の中でも特に主だった「祖」に対しては墳丘形態や規模の条件が加わっていたと思われる。この祭式を神祭りと比較すると、副葬品は幣帛に、酒食は神饌に相当し、「神」と「祖」は、貴重な品「幣帛」と酒食「神饌」を捧げるという、共通した方法(祭式)で祭られる存在として認識されていたと言ってよいだろう。

古墳副葬品と祭祀遺物との類似性から考えられる「神」と「祖」との関係については、近藤義郎が「この古墳祭祀に際し、亡き首長に副えられた品々と同じ内容のものが、福岡県沖ノ島では神々に捧げられている。舞台装置は異なるが、このことは、神々と祖霊が実は、同じ世界に住んでいたことを人々が信じていたことを示しているかもしれない」と指摘している。³³⁾「神」と祖霊は同じ方法で祭るといふ考え方は、前方後円墳の成立期、三世紀頃まで遡るかもしれない。しかし、ここで注意しなければならないのは、稲荷山古墳では、主体部における鉄製武器・武具、工具、馬具の供献、造り出しにおける酒食の供献という、四世紀後半から五世紀に形成される祭式とともに「上祖」の文字が使用されている点である。この時期における古墳祭式の変化と同調するように、神祭りの場、祭祀遺跡における供献品のセットが成立し、全国的に類似した祭祀遺跡が明確に認められるようになる。その変化の直後、五世紀後半に稲荷山古墳が築かれ、新たに埼玉古墳群の形成が始まり、その起点で「上祖」の文字が使用されていたのである。「神」

と「祖」の関係は、三世紀以来の要素を持ちながらも、その形成には五世紀という時期が大きな画期となっていたと考えてよいだろう。

四、生者と死者の景観

埼玉古墳群に見られる五世紀代の古墳群形成は、一〇〇m級の前方後円墳を擁する大規模な古墳群のみでなく、中小規模の古墳群でも起こっていた。次に、その具体的な例を千葉県千葉市「おゆみ野地区」遺跡群の発掘調査成果から見てみよう。「おゆみ野地区」遺跡群は、千葉県千葉市の東南部、下総国の南端に位置し、東京湾に面した台地と支谷が入り組んだ地形に立地する。約六〇〇haのニュータウン建設に先立ち、三九遺跡で総面積八五万㎡の発掘調査が実施されていた。³⁴ その調査成果からは、広範囲に分布する各時代の遺跡の変遷を、時代毎に景観復元して分析することが可能となっている。

集落と古墳群の景観変遷 ここで分析の対象とする遺跡は、おゆみ野地区の北端に位置する高沢遺跡³⁵・高沢古墳群³⁶・生浜古墳群³⁷・南二重堀遺跡³⁸である。おゆみ野地区の北部には、南西から北東に向かって赤塚支谷の谷津田が入るが、高沢遺跡は、この谷津田に面した標高三五m前後の台地上に立地する集落遺跡である。古墳時代中期(五世紀後半)から平安時代(十世紀)までの竪穴建物三五〇軒が検出されている。東側に小さな谷を挟んで位置する南二重堀遺跡には古墳時代前期・中期の集落と後期の古墳群が立地しており、高沢遺跡の北側に隣接して古墳時代後期の高沢古墳群と生浜古墳群が位置する。

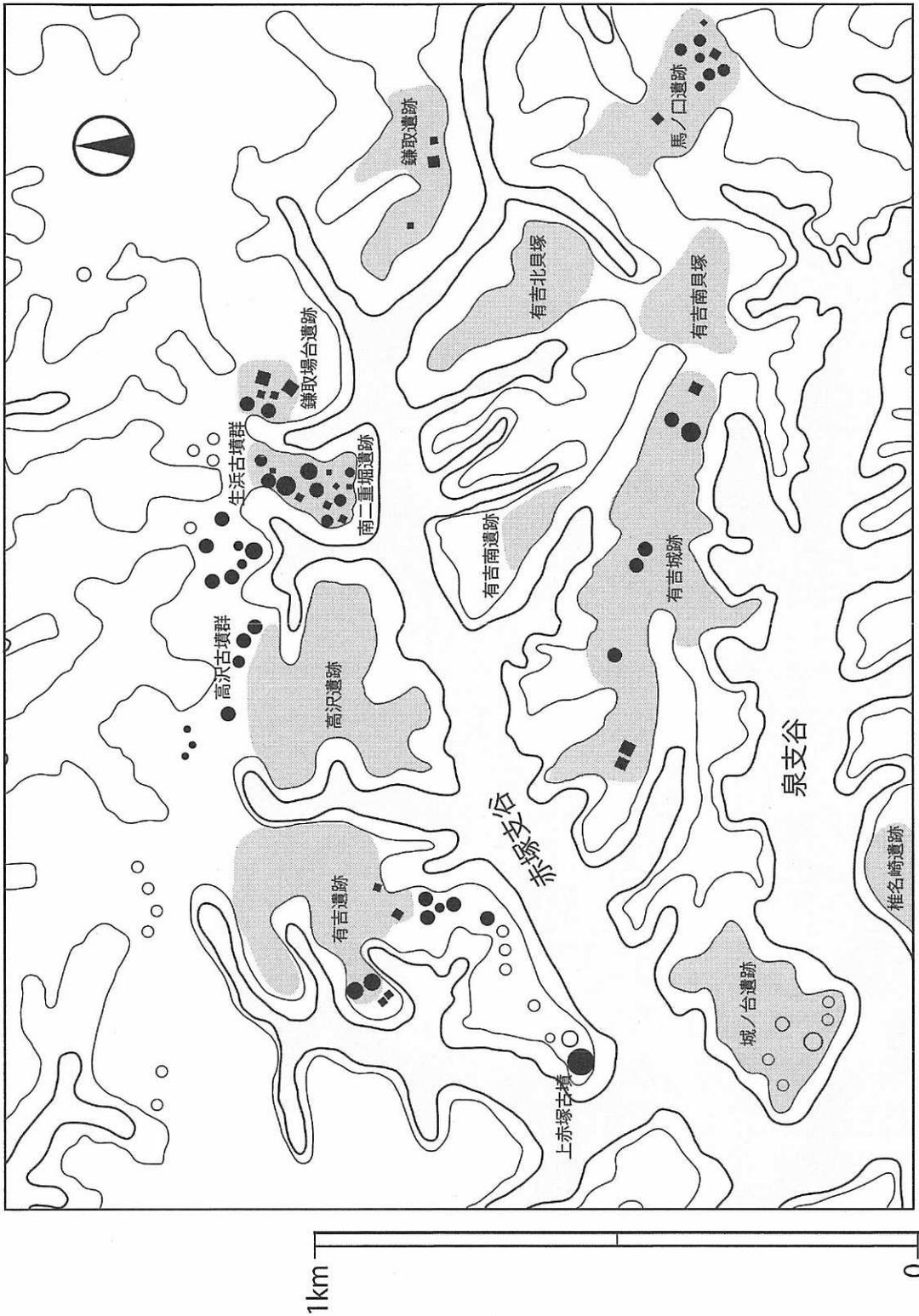
遺構の変遷を見る上で基準とする土器型式と年代観は、君津郡市文化財センターの古墳時代前期土器編年³⁹、小沢洋

による房総の古墳時代中・後期土器編年⁽⁴⁰⁾を使用し、須恵器の陶邑編年⁽⁴¹⁾と湖西編年⁽⁴²⁾も併せて参考としている。また、奈良・平安時代については、『房総における歴史時代土器の研究』⁽⁴³⁾で示された段階と年代観に基づいている。以下、年代順に集落と古墳群の景観変化を辿ることとしよう。

◎三世紀～四世紀(古墳時代前期前葉～後葉) 古墳時代前期前葉、三世紀頃には「おゆみ野地区」の北部、赤塚支谷の奥まった部分の台地上に小規模な集落(馬ノ口遺跡)が確認でき⁽⁴⁴⁾、赤塚支谷内の谷津水田の開発と連動して集落が形成され始めたと考えられる。南二重堀遺跡では三世紀に七軒の竪穴建物が確認でき、前期中葉～後葉の四世紀頃にかけて三軒の竪穴建物が認められ、三世紀から四世紀にかけて断続的ながらも集落が営まれていたと考えられる。

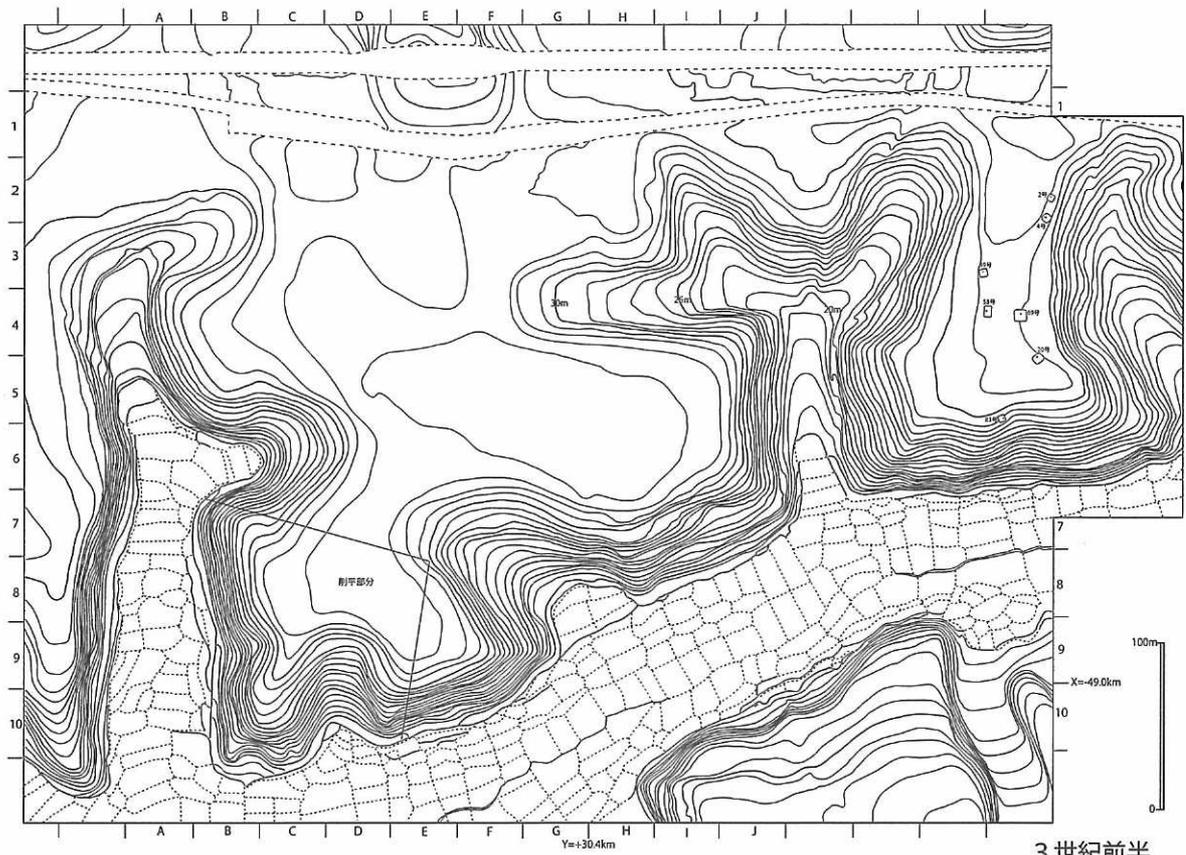
◎四世紀末期～五世紀中頃(古墳時代前期末葉～中期四期) 五世紀前半、赤塚支谷の入り口を見降ろす台地先端部に、径三一mの円墳、上赤塚古墳が築かれ、景観の上で大きな変化が現れる。この古墳では木棺直葬の主体部二基を検出しており、第一主体部からは石枕・立花、勾玉等の玉類、銅釧、鉄製直刀、鉄製方形鋤先・直刃鎌、鉄斧、石製模造品の斧形と鎌形が、第二主体部からは、勾玉等の玉類、鉄剣、鉄製方形鋤先・直刃鎌、細型鉄鋌の可能性がある板状鉄製品が出土しており⁽⁴⁵⁾、ここでも、祭祀遺跡で出土する鉄製品と共通する組成が認められる。

上赤塚古墳の築造直前、四世紀末期から南二重堀遺跡の集落では竪穴建物数が増加し、五世紀前半には最盛期を迎える。四世紀末期で八軒、五世紀前半で十五軒と増加し、鉄鋌、鉄製鎌雛形、鉄製鉈、石製有孔円板、滑石製勾玉が伴う。特に鉄鋌や鉄製農・工具が存在し、それ以前の集落とは性格的に一線を画すとともに、上赤塚古墳とも密接な関係にあったと推定できる。鉄製農・工具や鉄素材(鉄鋌)の流入は、生産活動に大きな影響を与えたと推定でき、集落規模の拡大は、これに対応していたと考えられる。また、上赤塚古墳は、赤塚支谷では最古で最大規模の古墳であり、南二重堀遺跡の集落にとって特別な人物、鉄素材と鉄製品を入手し、集落規模を拡大した人物を葬り祭る古墳で

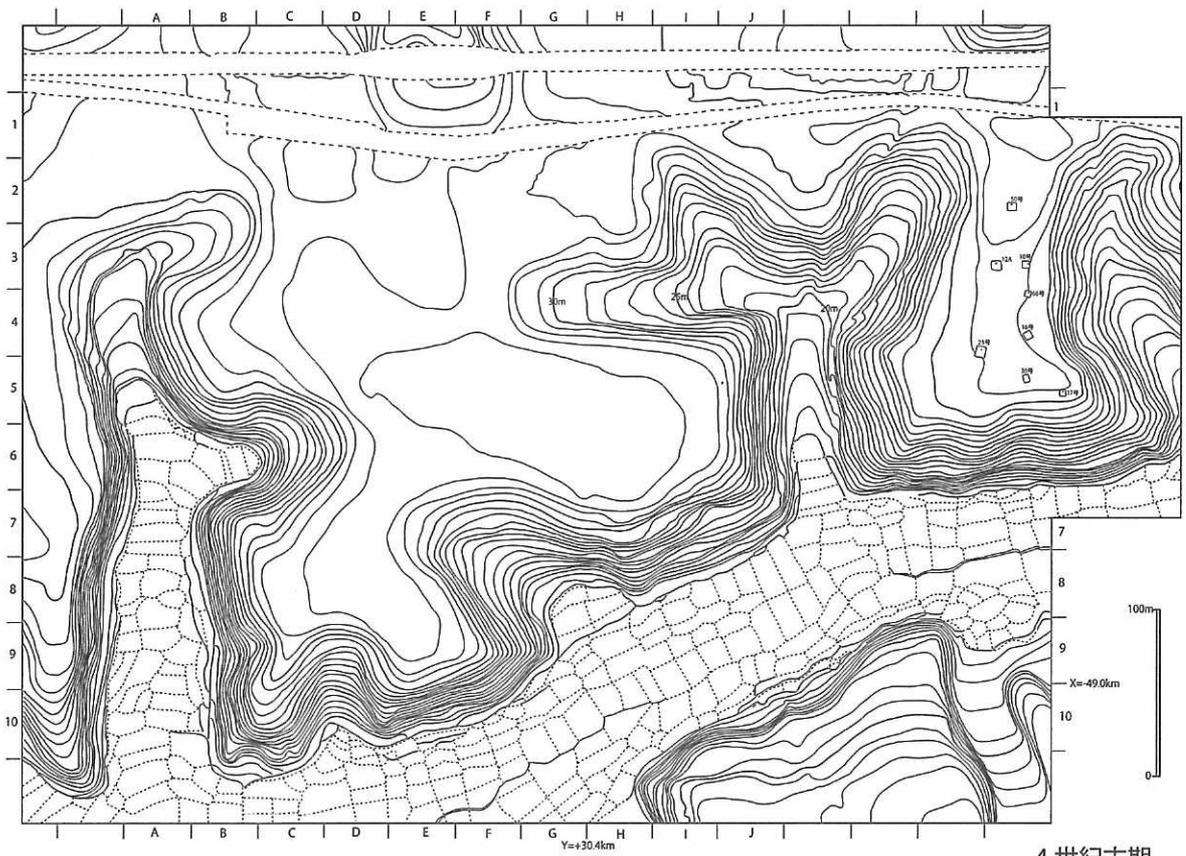


第1図 おゆみの野地区 集落遺跡・古墳位置図

(●・■: 調査古墳、○: 未調査古墳。■: 集落遺跡範囲。註 53 文献、白井久美子「第6章 まとめ」に掲載された図に基づき作成。)

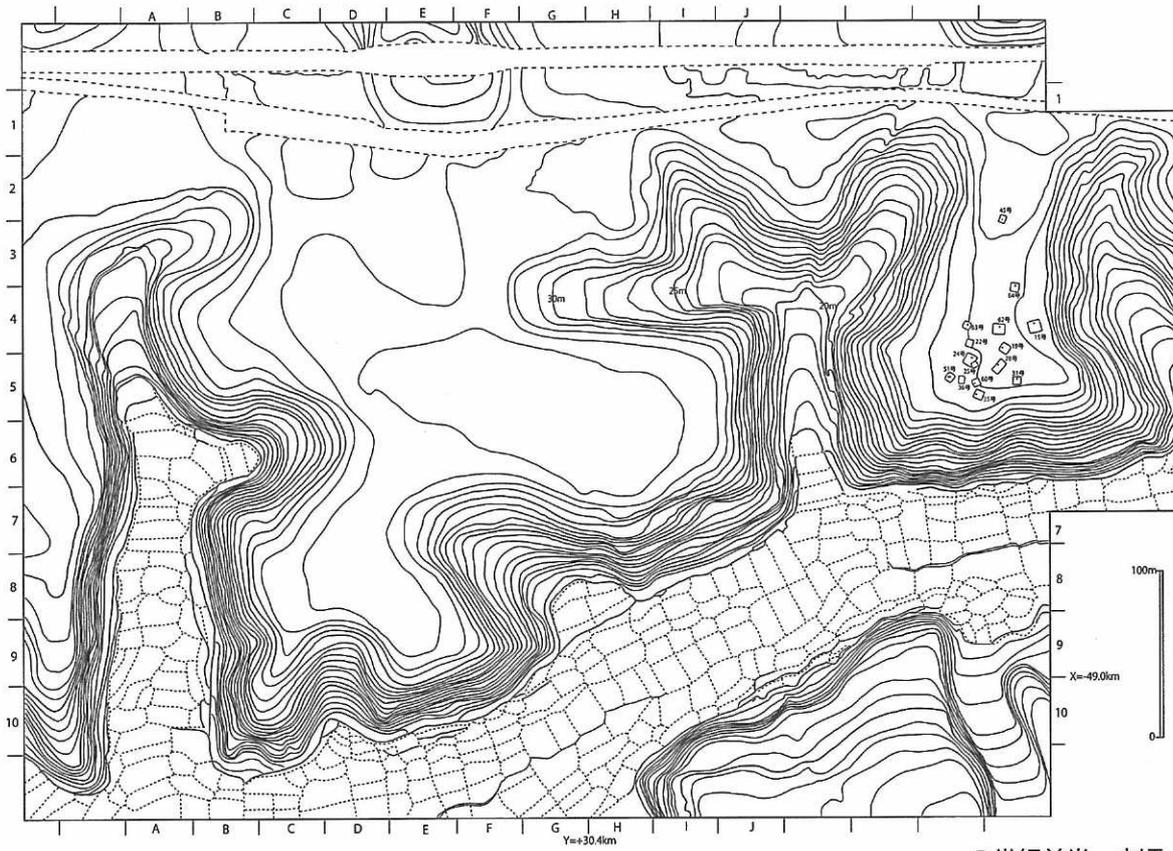


3世紀前半

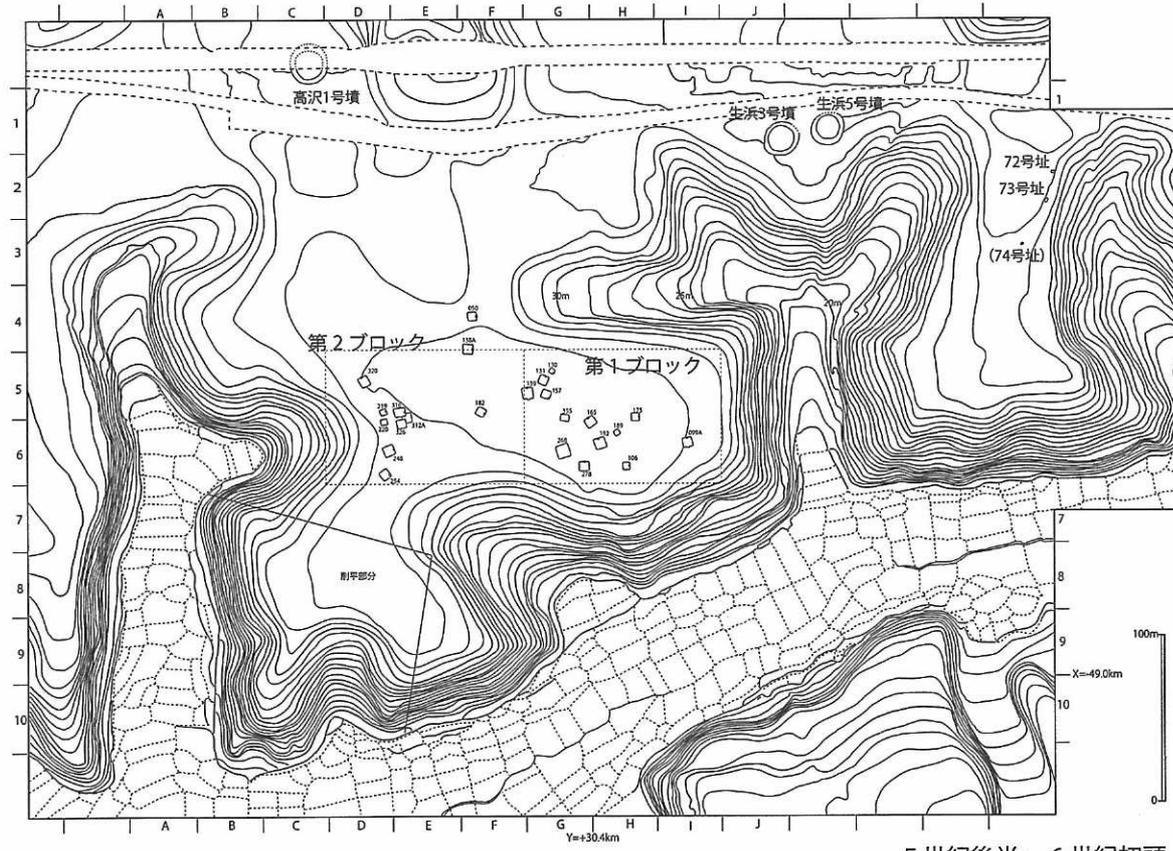


4世紀末期

第2図 高沢遺跡周辺景観変遷図(1)

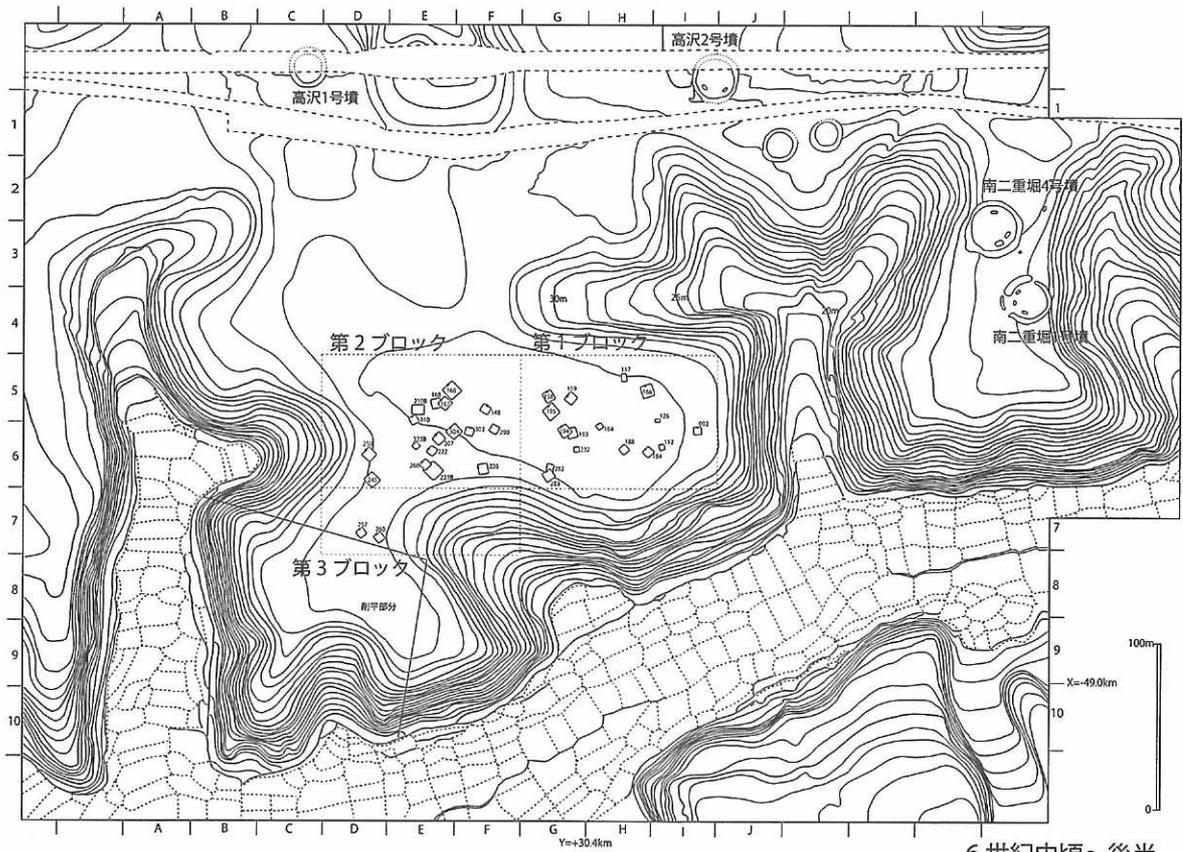


5世紀前半～中頃

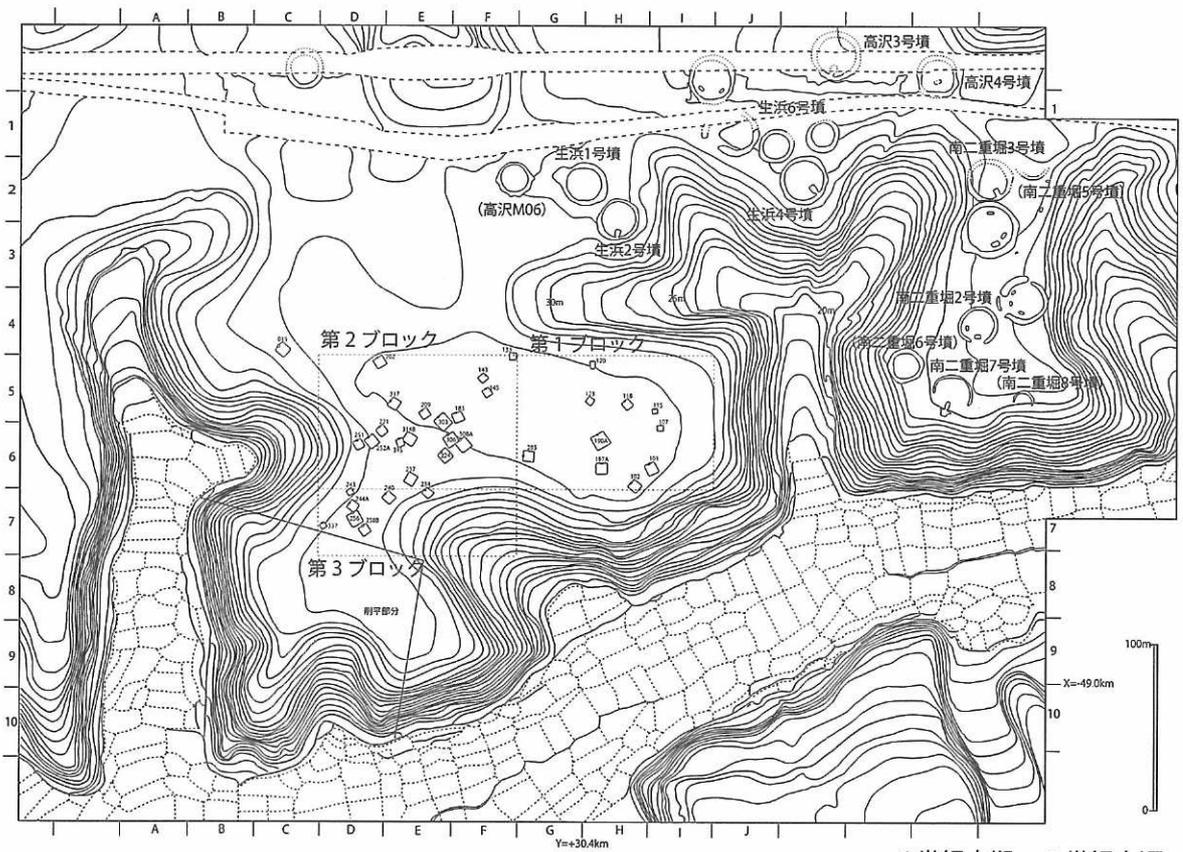


5世紀後半～6世紀初頭

第3図 高沢遺跡周辺景観変遷図(2)

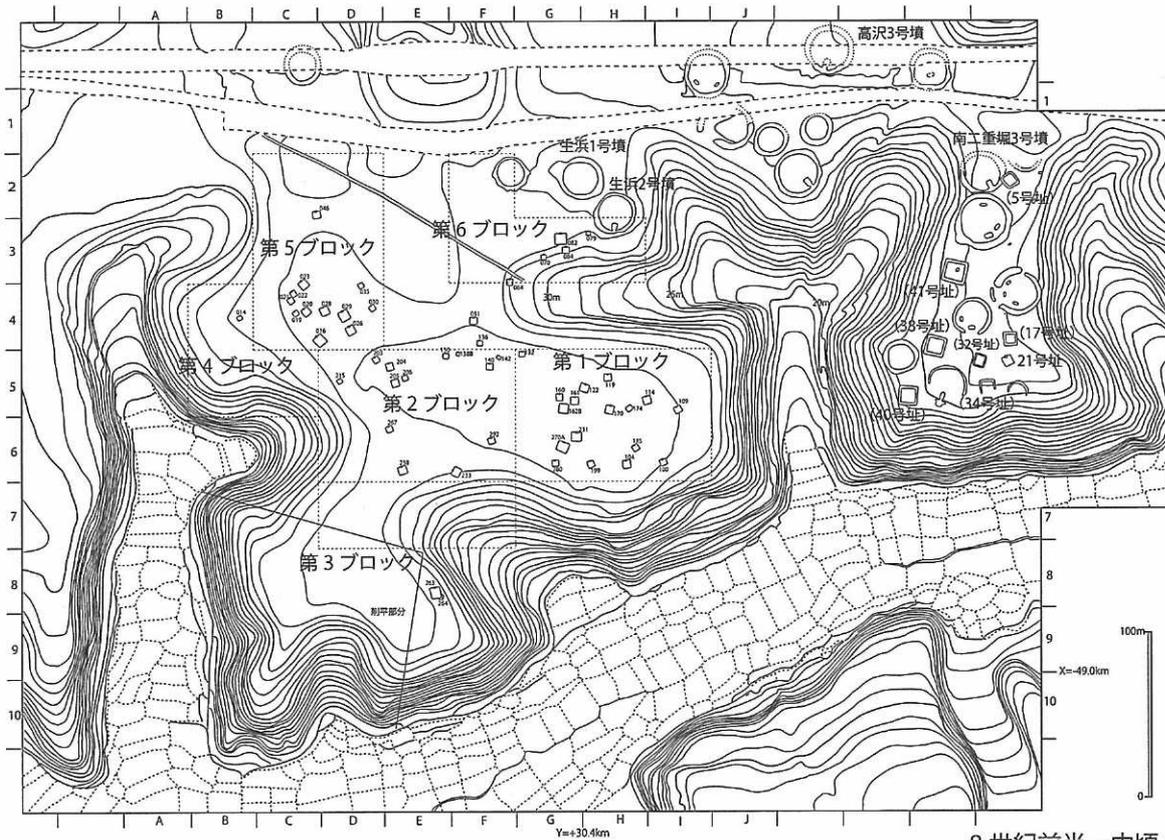


6世紀中頃～後半

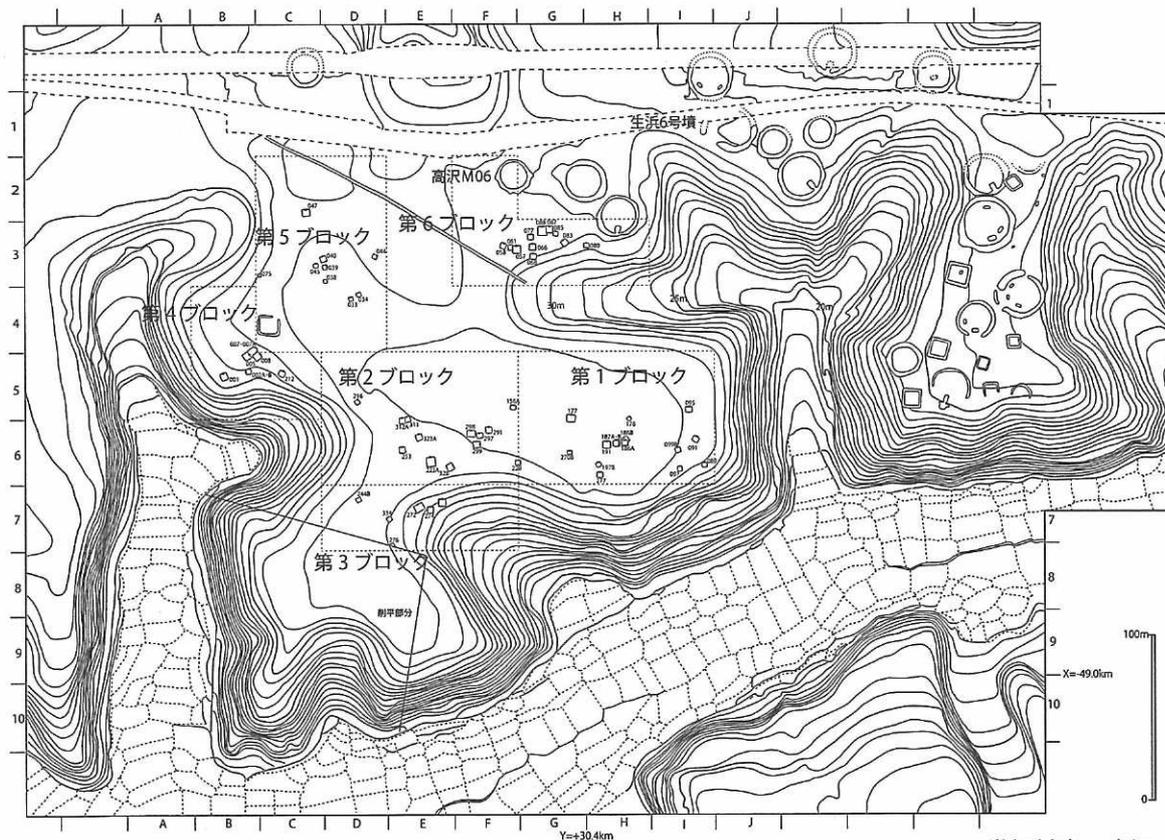


6世紀末期～7世紀中頃

第4図 高沢遺跡周辺景観変遷図 (3)

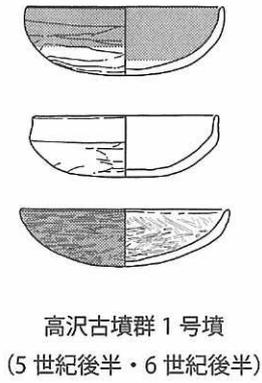


8世紀前半～中頃

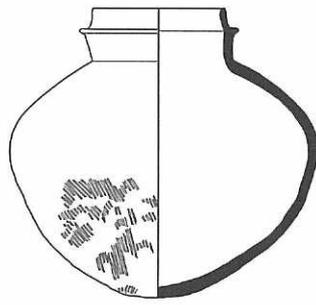


9世紀前半～中頃

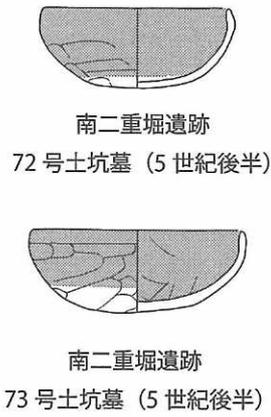
第5図 高沢遺跡周辺景観変遷図(4)



高沢古墳群 1号墳
(5世紀後半・6世紀後半)

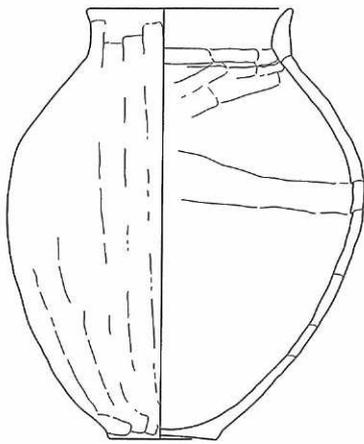
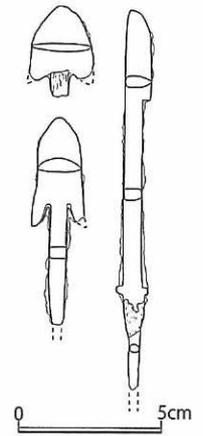


生浜古墳群 5号墳
(5世紀後半)

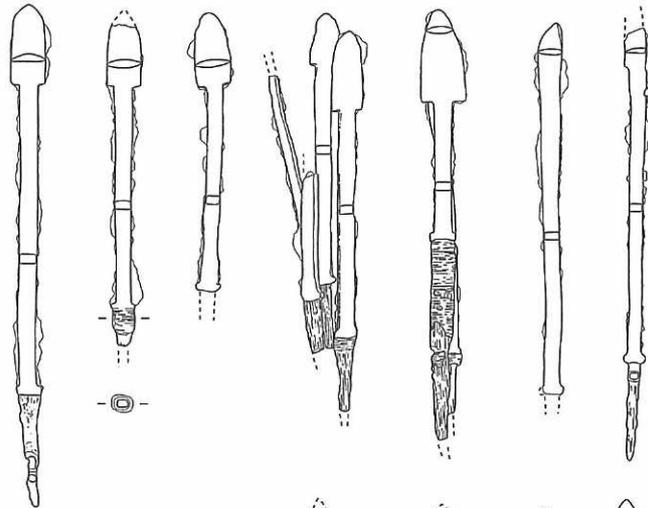
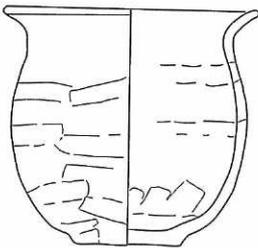


南二重堀遺跡
72号土坑墓 (5世紀後半)

南二重堀遺跡
73号土坑墓 (5世紀後半)



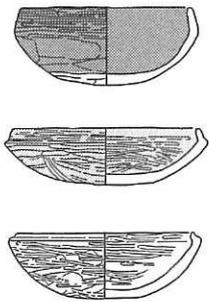
生浜古墳群 3号墳
(5世紀後半～6世紀初頭)



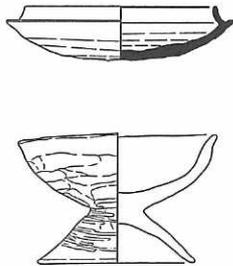
南二重堀遺跡 4号墳第1主体部
(6世紀中頃)



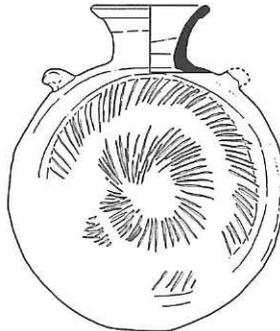
0 5cm



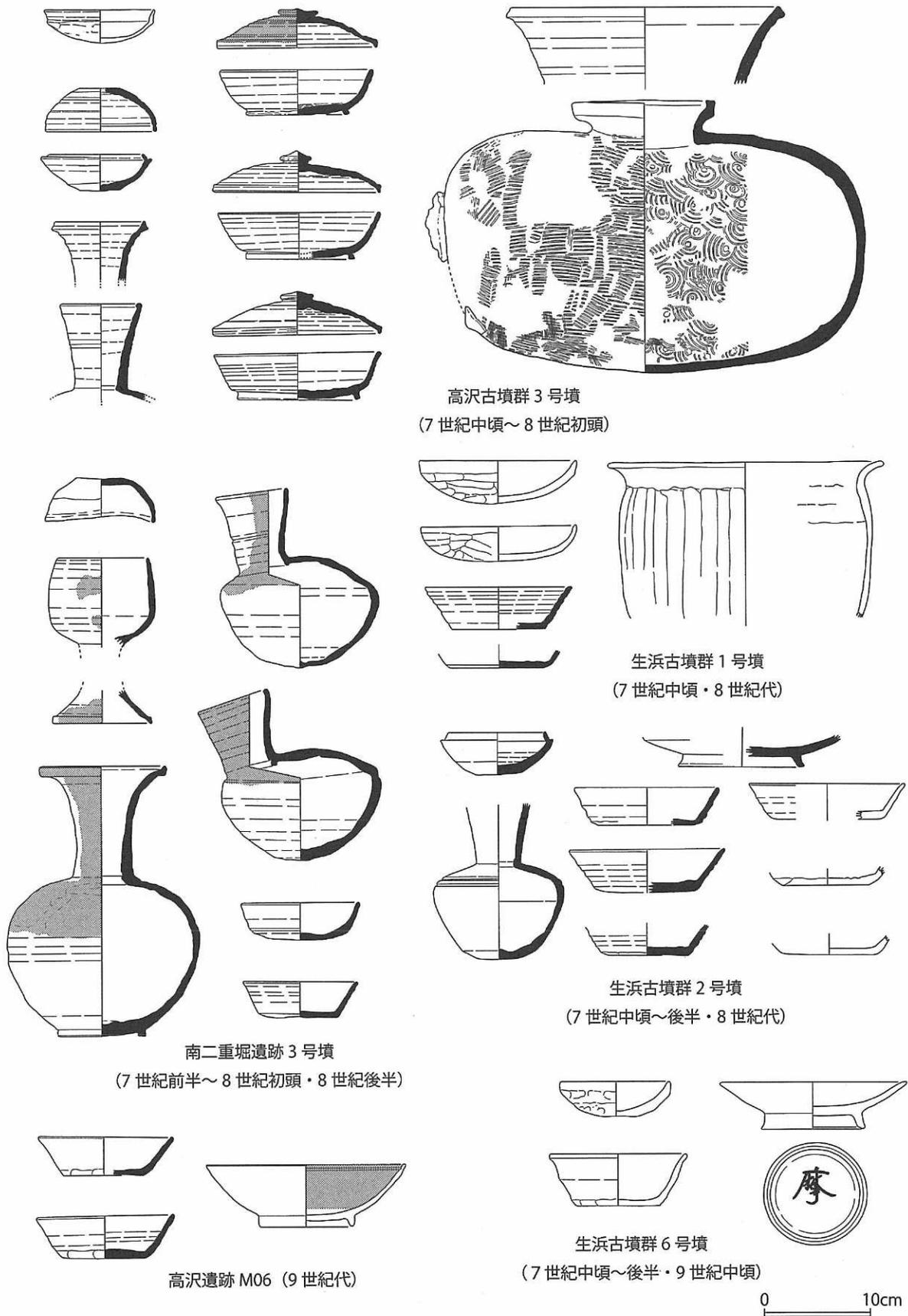
0 10cm



高沢古墳群 2号墳 (6世紀後半)



第6図 高沢・生浜古墳群・南二重堀遺跡古墳群出土遺物 1 (5世紀後半～6世紀)



高沢古墳群 3号墳
(7世紀中頃～8世紀初頭)

生浜古墳群 1号墳
(7世紀中頃・8世紀代)

生浜古墳群 2号墳
(7世紀中頃～後半・8世紀代)

南二重堀遺跡 3号墳
(7世紀前半～8世紀初頭・8世紀後半)

高沢遺跡 M06 (9世紀代)

生浜古墳群 6号墳
(7世紀中頃～後半・9世紀中頃)

0 10cm

第7図 高沢・生浜古墳群・南二重堀遺跡古墳群出土遺物 2 (7世紀～9世紀)

第1表 高沢遺跡 グリッド別竪穴建物数変遷表(太ゴシック・網掛けのグリッドは、一辺7m以上の大型竪穴建物が存在。)

遺構ブロック	第1						第2						第3		第4			第5				第6				その他							
	G5	G6	H5	H6	I5	I6	D5	D6	E5	E6	F5	F6	D7	E7	B4	B5	C5	C2	C3	C4	D2	D3	D4	F2	F3	G3	H3	B2	E4	E8	E9	F4	
5世紀後半	4	4		4			1	2	1	2																							
5世紀末期～6世紀初頭				1		1	1	1			2																					1	
6世紀前半	2	1	1	2		1	1	1		2	1	4	1										1						1				
6世紀中頃	1	2				2			1	3	1	2																					
6世紀後半	5	2		3		1	2	3	4		1	2																					
6世紀末期～7世紀初頭	1	2			1	1	1	1	2	2		3	2																				
7世紀前半			1	1		1	1	1	4		1	2								1													
7世紀中頃			2				1	1			2																						
7世紀後半	2			1			1	1		3	1	2	1																				
8世紀前半	2	1	2	2	2	1			2			2						1			1	3		2							1		
8世紀中頃	3	1	2	1			2	2	2	3			1							6		2		1	1						2		
8世紀後半				1		1	1	2	1		6		1	1	1		1	1	1		4	3	1	1	2				2				
9世紀前半		1		7	1	2	1			4	1		1	1				1	1			2	1	1	2								
9世紀中頃	1					2				2		5	1	3		6	1		1			2	1	2	5	1							
9世紀後半	3	1		1	1	2	1			1	1	2	1	2	2	1							1	1	2		1			1			
10世紀前半										1	1				1							1											
不明		2	3	3		4	3	1	3	5	4	4	5	1	1	3				1		1	1	1	2				1	4			
グリッド小計	22	15	13	29	5	19	13	10	17	33	21	28	17	12	5	12	1	3	3	9	1	9	14	1	6	16	2	1	1	2	1	9	
遺構ブロック総計	103						122						29		18			39				25				14							
ブロック別年代判明率(%)	88.2						83.6						79		78			92.5				88				82.1							
全体年代判明率(%)	84.9																																

第2表 高沢古墳群・生浜古墳群・南二重掘遺跡 古墳一覧表

	古墳	墳形	規模 (墳丘径・周溝径)	主体部	出土遺物	遺物型式	年代
高沢古墳群	1号墳	円墳	16m・23m	不明	土師器杯3、甕1、須恵器甕1(周溝内)	土師器中期5期、後期4期	5世紀後半～6世紀初頭・6世紀後半
	2号墳	円墳	23m・29m	木棺直葬(2基)、周溝内土坑	直刀、鉄鎌(長頸鎌腸挟長三角式・両関長三角式・片関片刃箭式・無頸鎌腸挟長三角形式)、刀子(第1主体部)、須恵器蓋杯・提瓶、土師器杯・高杯(周溝内)	T K 43、土師器後期5期	6世紀後半
	3号墳	円墳	24m・30m	横穴式石室(1基)	直刀、鉄鎌(長頸鎌腸挟長三角式・両関長三角式・両関小形三角式・片関片刃箭式・無関片刃箭式)、刀子、馬具鞍金具(鞍金具)、空玉?、金環、水晶製切子玉、ガラス小玉、須恵器蓋杯、高台付き蓋杯・長頸瓶・横瓶・甕、土師器杯(羨門付近周溝内)	T K 217、湖西産須恵器	7世紀中頃・7世紀末期～8世紀初頭
	4号墳	円墳	20m・23.5m	木棺直葬(1基)	刀子、鉄鎌(長頸鎌両関長三角形式)(主体部付近攪乱内)、須恵器蓋杯、土師器高杯・甕、石製有孔円板(周溝内)	T K 209	6世紀末期～7世紀初頭
	高沢遺跡M06	円墳	20m・22m	不明	須恵器杯・灰釉陶器碗	須恵器杯(8世紀後半～9世紀前半)・灰釉陶器碗K90	6～7世紀代?・9世紀代

	古墳	墳形	規模 (墳丘径・周溝径)	主体部	出土遺物	遺物型式	年代
生 浜 古 墳 群	1号墳	円墳	22m・26m	不明	土師器杯・甕、須恵器杯・甕	土師器後期7期、 須恵器杯(8世紀 中頃～後半)	7世紀中頃・ 8世紀前半～ 後半
	2号墳	円墳	14m・27m	横穴式石室 (1基)	直刀、刀子、鉄鏃(雁又式、無茎鉄腸扶長三角形式、 長頸鉄腸扶長三角式・両関長三角式・片関片刃箭式・ 無関片刃箭式・無関両刃箭式)、須恵器蓋杯・杯・ 長頸瓶・甕、土師器杯	T K 217、須恵器 杯(8世紀)	7世紀中頃～ 後半・8世紀 前半～後半
	3号墳	円墳	15.5m・20m	不明	土師器甕(周溝内)	土師器中期5期	5世紀後半～ 6世紀初頭
	4号墳	円墳	25m・29m	横穴式石室 (1基)	直刀、刀子、鉄鏃(無茎鉄腸扶長三角形式、長頸鉄 腸扶長三角式・両関長三角式・無関片刃箭式)、須 恵器片、土師器杯	土師器後期7期	7世紀中頃
	5号墳	円墳	13m・19.5m	不明	須恵器壺	T K 208～47	5世紀後半
	6号墳	円墳	約20m・35m	不明	土師器杯、ロクロ土師器杯・皿	土師器後期7～8 期、ロクロ土師 器(9世紀中頃)	7世紀中頃～ 後半・9世紀 中頃
南 二 重 堀 遺 跡	1号墳	円墳(帆 立貝式)	21.8m・ 28.4m	木棺直葬(2 基)、箱式石 棺(1基・第1 主体部)	直刀、刀子、鉄片、鉄鏃(長頸鉄腸扶長三角形式・ 三角形式)(第1主体部)、直刀、鉄鏃(長頸鉄無関片 刃箭式)、耳環(第2主体部)、直刀、刀子、鉄鏃(無 関鉄長三角形式、長頸鉄両関長三角形式・片関片刃 箭式・無関片刃箭式・無関鑿箭式・腸扶長三角形式・ 三角形式)(第3主体部)	鉄鏃組成(第3主 体部は長頸鉄両 関長三角形式・ 片関片刃箭式を 主体)	6世紀後半
	2号墳	円墳	19m・23m	木棺直葬(1 基)、箱式石 棺(1基・第1 主体部)	直刀、鉄鏃(長頸鉄無関片刃箭式・両関小形三角式)、 鐮子、耳環(第1主体部)、ガラス小玉(第2主体部)	鉄鏃組成(長頸鉄 無関片刃箭式・ 両関小形三角式 で構成)	7世紀前半～ 中頃
	3号墳	円墳		横穴式石室 (1基)	直刀・方頭直刀、刀子、鉄鏃(長頸鉄無関鑿箭式・ 小形三角式・腸扶長三角式)、鐮子(第1主体部・羨 門付近周溝)、須恵器杯・長頸瓶・提瓶・脚付き杯(周 溝内)	T K 217、須恵器 杯(8世紀中頃)	7世紀前半～ 8世紀初頭・ 8世紀後半
	4号墳	円墳	27.5m・ 34.6m	木棺直葬(3 基)	直刀、刀子、鉄鏃(無茎鉄腸扶長三角形式、長頸鉄 両関長三角形式・無関片刃箭式・無関鑿箭式)(第1 主体部)、刀子(第2主体部)、直刀、刀子、鉄鏃(無 茎鉄腸扶長三角形式、長頸鉄両関長三角形式・無関 片刃箭式)(第3主体部)	鉄鏃組成(長頸鉄 両関長三角形式 を主体)	6世紀中頃
	5号墳	円墳		不明			6～7世紀 代?
	6号墳	円墳	15.3m・ 21.8m	不明			6～7世紀 代?
	7号墳	円墳	22.1m・ 25.8m	横穴式石室 (1基)	直刀、鉄鏃(無茎鉄腸扶長三角形式、長頸鉄無関片 刃箭式・小形三角式・片関片刃箭式・無関鑿箭式・ 両関鑿箭式)、耳環(第1主体部)	鉄鏃組成(長頸鉄 無関片刃箭式・ 小形三角式・無 関鑿箭式を主体)	7世紀中頃
	8号墳	円墳	10m・12.8m	不明			6～7世紀 代?
	3号址	方形周溝	墳丘規模 8.5m×9.1m	不明		3号墳を切る。	3号墳以降、 7世紀末期～ 8・9世紀?
	17号址	方形周溝	墳丘規模 8.5m×7.8m	不明			7世紀末期～ 8・9世紀?
	32号址	方形周溝	墳丘規模 7.6m×7.1m	不明			7世紀末期～ 8・9世紀?
	34号址	方形周溝	墳丘規模 7m以上×8.8m	不明			7世紀末期～ 8・9世紀?
	38号址	方形周溝	墳丘規模 11.7m×11.8m	不明			7世紀末期～ 8・9世紀?
	40号址	方形周溝	墳丘規模 11.7m×11.2m	不明			7世紀末期～ 8・9世紀?
	41号址	方形周溝	墳丘規模 13.9m×14.4m	不明			7世紀末期～ 8・9世紀?
	29号址	方墳周溝?	墳丘規模 7.2m×7.2m	不明			3～4世紀?
57号址	方墳周溝?		不明		2号墳々丘下	3～4世紀?	
72号址	墳丘無し		土坑墓	土師器杯・甕	中期5期	5世紀後半	
73号址	墳丘無し		土坑墓	土師器杯、刀子、鉄鏃(無頸鉄腸扶長三角形式、長頸 鉄腸扶長三角形式・片関片刃箭式)	中期6期	5世紀後半	
74号址	墳丘無し		土坑墓	鉄鏃片		5世紀後半?	

あったと考えられる。そして、この後、集落景観に大きな変化が表れる。

◎五世紀後半～六世紀前半(古墳時代後期〇期～二期) 五世紀中頃を境に、南二重堀遺跡の集落は消滅、五世紀後半には土坑墓二基(七二・七三号址)が作られ、遺跡の範囲は墓域へと変貌する。南二重堀遺跡の東側に小さな谷を隔てて位置する鎌取場台遺跡でも、小規模な集落が消滅し二基の円墳(〇一四・〇一五号周溝、墳丘径一〇・四～一一・八m)が作られており、南二重堀遺跡と同調した変化が認められる。⁴⁶⁾

五世紀後半、南二重堀遺跡の集落消滅と対照的に、西側の谷を隔てた台地上に高沢遺跡の集落が成立する。集落は、単位集団に相当する竪穴建物の二か所のまとまり(第一・二ブロック)で構成され、東側の第一ブロックには、一辺約八mの大型竪穴建物が存在する。

この集落の北側、高沢古墳群、生浜古墳群では、五世紀後半から六世紀初頭までの間に、高沢古墳群一号墳(墳丘径一六m)、生浜古墳群三・五号墳が築かれたと考えられ、北側の高沢・生浜古墳群から谷を隔てた東側の南二重堀遺跡にかけて、高沢遺跡の集落に対応すると思われる墓域が成立する。これらの古墳周溝からは、土師器杯・甕、須恵器有蓋壺などの土器類が出土しており、古墳への飲食供献が推定できる。

高沢遺跡の西、上赤塚古墳から連続する台地上に立地する有吉遺跡でも、高沢遺跡とほぼ同時期に集落の本格的な形成が始まり、その西側には、円墳で構成され、上赤塚古墳へと連続する古墳群が位置している。⁴⁷⁾つまり、高沢・有吉遺跡の集落の周囲に展開する墓域(古墳群)は、巨視的に見ると上赤塚古墳から連続する形で設定されていたことになる。

◎六世紀中頃～後半(古墳時代後期三期～四期) 高沢遺跡の集落では、第一・二ブロックは維持され、一辺七～八mの大型竪穴建物が営まれる一方、第二ブロックの南側に新たな竪穴建物群の第三ブロックが成立し、集落規模の拡大

が認められる。第二ブロックの竪穴建物(一六八)から鞆羽口が出土しており、鉄の加工工場の存在を示唆する。

古墳群では、集落規模の拡大と連動するように、六世紀中頃から後半にかけて、最大規模の南二重堀遺跡四号墳(墳丘径二七・五m)と同一号墳、高沢古墳群二号墳が築かれ、墓域(古墳群)の範囲が拡大する。集落と古墳群の関係を見ると、高沢遺跡第一ブロックの大型竪穴建物(一一六・二八二・三〇三)から両関長三角形式長頸鏃、第二ブロック竪穴建物(二二六)から無頸鏃が出土し、南二重堀遺跡四号墳の鉄鏃と類似しており、⁽⁴⁸⁾拡大した古墳群との関係が確認できる。

◎六世紀末期～七世紀代(古墳時代後期五期～八期) 高沢遺跡では、七世紀前半から中頃にかけて、第一～三ブロックで一辺七m以上の大型竪穴建物が存在し、前代から継続して集落が営まれる。この時期、出土土器には駿河地方の駿東形甕、北関東の有段口縁杯が含まれており、他地域との人的・物的交流が活発化していたことがうかがわれ、集落規模の拡大との関連が推定できる。

古墳群では葬法の面で大きな変化が生じる。それまで、古墳の主体部は木棺直葬であったが、六世紀末期から七世紀中頃には箱式石棺・横穴式石室が導入される。そして、高沢古墳群三・四号墳、生浜古墳群一・二・四・六号墳、南二重堀遺跡二・三・七号墳の円墳が次々に築かれ、墓域の範囲が最大となる。

高沢遺跡の集落の出土遺物を見ると、七世紀前半、第一ブロック竪穴建物(一一八)から両関長三角形式長頸鏃が出土しており、これは南二重堀遺跡一号墳の鉄鏃と類似する。また、七世紀後半、第二ブロック竪穴建物(一五二)から、馬具の帯金具と思われる鍍金・鋳留めされた銅板が出土し、これに対応して、七世紀中頃の築造と考えられる高沢三号墳では馬具鞍金具(鞍金具)が出土している。高沢遺跡の集落には、鉄鏃・金銅馬具を所有する人物が居住したことがうかがえ、古墳群との関係は維持されていたと推定できる。

◎八世紀代 八世紀になると、第一・二ブロックの北側に新たな竪穴建物群(第四・六ブロック)が成立し、集落規模はさらに拡大するが、古墳時代以来の第一・三ブロックは維持され、集落の系譜は連続している。これらのうち第一ブロックで墨書土器「大新家」が、第二ブロックで銅製帯金具が出土し、識字層や有位者の存在を想定できる。また、第二ブロックで金銅馬具が出土しており、八世紀の奈良時代には、これら伝統的な竪穴建物群の居住者が集落の指導的な地位にあったと考えられる。

古墳群を見ると、南二重堀遺跡では、九世紀にかけて七基の方形墳が築かれ、集落と墓域の位置関係は維持される。特に、六・七世紀の円墳には、高沢古墳群三号墳、生浜古墳群一・二号墳、南二重堀遺跡三号墳のように、八世紀初頭から八世紀中頃までの須恵器杯の出土する例があり、古墳への飲食の供献が古墳時代同様、継続して行われていたとみてよいだろう。なお、南二重堀遺跡の古墳群内では、八世紀代と考えられる竪穴建物(二一号住居址)が一軒確認できる。これは五世紀後半から九世紀までの間では唯一の例で、大形の高杯一点と盤二点が出土した。盤は丁寧に磨かれ、一点は赤彩が施されている。立地や出土遺物から古墳の祭祀・儀礼との関連が想定できる特殊な竪穴建物と見てよいだろう。

◎九世紀代 平安時代の前期、九世紀代においても、集落と墓域の景観は、八世紀の状態が維持されている。墓域の状況を見ると、生浜六号墳、高沢遺跡M〇六では、九世紀代の須恵器杯、灰釉陶器碗、ロクロ土師器杯・皿が出土している。古墳群の中でも集落に近い部分に位置する古墳を中心にこの時期の土器類が出土するが、供膳具を中心とする組成から、古墳への飲食供献の痕跡と考えられ、集落と古墳群(墓域)の境界付近に位置する古墳で、飲食供献が継続して行われていたと推定できる。

この後、高沢遺跡の集落では、九世紀末期から十世紀前半には第一・二ブロックの範囲で掘立柱建物群が形成され

るが、十世紀前半を最後に集落は消滅し、墓域でも新たな墓は営まれず、廃絶に向かっている。集落と墓域が連動して消滅する状況が認められる。

次に、高沢遺跡と南二重堀遺跡、高沢・生浜古墳群の分析結果から読み取れる特徴的な点をまとめておきたい。**集落と墓域の景観維持** まず、集落と墓域の景観が、五世紀後半から九世紀代まで、継続的に維持される点があればいい。

五世紀後半に集落の立地が一変し、高沢遺跡の集落とその北側と東側に墓域(古墳群)が立地する景観が成立する。その後、高沢遺跡の集落には、一辺七m以上の大型竪穴建物、五世紀後半から七世紀代にかけて継続的に造り続けられており、集落内での有力者の存在を物語る。また、集落と古墳群では、ともに鉄鏃や馬具が出土し、両者の結び付きを示し、高沢遺跡の集落に生活した人々の中で、武器や馬具等を保有できた、集落内の中核的な人物が、集落の北と東に展開する古墳群に葬られたと推定できる。

古墳の埋葬状況を細かく見ると、高沢古墳群二号墳、南二重堀遺跡一・二・四号墳では、二〜三基の複数埋葬が確認できる。中でも南二重堀遺跡一・二号墳では、木棺直葬と箱式石棺が並存し、古墳一基当たり、二〜三人程度の人物が時間を置いて葬られたと考えられ、追葬が可能な横穴式石室を備える高沢古墳群二・三号墳、生浜古墳群二・四号墳、南二重堀遺跡七号墳も同様と考えられる。

そこに葬られた人物の関係は、群馬県高崎市山ノ上古墳の事例から推定が可能である。この古墳は、墳丘径が約一二mの円墳と考えられ、横穴式石室を持ち築造年代は七世紀第二四半期が推定されている。今回分析対象とした古墳の中では、生浜古墳群二号墳と規模・年代ともに類似する。ここには、辛巳(巳)年(六八一)に放光寺僧長利が母「黒売刀自」のため建立した山ノ上の碑が伴っている。この碑文の内容と古墳の築造年代から、山ノ上古墳は黒売刀自の

父のため築造され、他氏へ嫁していた娘が死後に追葬された可能性が指摘されている。⁽⁴⁹⁾ 高沢遺跡の集落に伴う古墳においても類似した状況を想定でき、集落内の主要な人物、具体的には竪穴建物群(単位集団)の中核的な人物、もしくはそれに準ずる人物が古墳を築造して埋葬され、その子の中で自ら古墳を築けない立場の者が、中核的な人物(家長・父)と同一墳に埋葬される。⁽⁵⁰⁾ これを世代毎に繰り返して、古墳群が形成されたと考えられる。

集落と古墳群(墓域)の位置関係・景観は、奈良・平安時代の八〜九世紀代にも維持されている。集落内では五世紀後半以来の竪穴建物群である第一・二ブロックが継続して営まれ、集落の中核的な集団となっていたと推定でき、七世紀代までの墓域内にも方形墳が作られている。

以上のことから、五世紀後半から九世紀まで、集落と墓域の景観は相互に関連しながら維持されていたことは明らかであり、長期間維持される居住域と墓域の景観の背景には、五世紀後半から九世紀まで継続する系譜意識の存在を想定してよいだろう。このような集落(居住域)と墓域の景観を維持した系譜意識は、『播磨国風土記』で居住域の設定者を「祖」とすると同時に、「祖」の墓を記憶し意識していることから、「祖」という観念をもとに受け継がれていたと考えられる。

八世紀初頭、居住域と墓域が同様に扱われている状況は、『続日本紀』慶雲三年(七〇六)三月丁巳(二三日)条の次の記述からもうかがえる。

頃者王公諸臣多占山澤。不事耕種。競懷貪婪。空妨地利。(中略)自今以後。不得更然。但氏々祖墓及百姓宅邊。裁樹爲林。并周二三十許歩。不在禁限。⁽⁵¹⁾

ここにみられる「氏々祖墓」は古墳群に、「宅」は居住域(集落)に対応させることができ、いずれも木立に囲まれた景観が復元できる。それは、ともに伝統的に受け継がれてきた場所として意識されていたため、王公諸臣の山澤占有

とは分けて扱われたのであろう。

では、「氏々祖墓」とはどのようなように認識されていたのだろうか。それを示すのが、『日本後紀』延暦一八年(七九九)三月丁巳(二三日)の記事である。

正四位下行左大辨兼右衛門督皇太子學士伊勢守菅野朝臣眞道等言。己等先祖。葛井。船。津。三氏墓地。在河内国丹比郡野中寺以南。名曰寺山。子孫相守。累世不侵。而今樵夫成市。採伐冢樹。先祖幽魂。永失所歸。伏請依舊令禁。許之。⁽⁵²⁾

ここには代々受け継がれた山林内の墓域の景観が記され、そこは「先祖の幽魂が帰る所」として認識されていた。そうすると、五世紀代から九世紀まで受け継がれていた、高沢遺跡の墓域(古墳群)は、「先祖の幽魂」「祖の霊」が所在する場所と認識されていたと考えるよいだらう。

古墳における飲食供献 「先祖の幽魂」「祖の霊」が所在すると考えられた古墳群、その遺物の出土状況に注目すると、今回、分析対象とした古墳群では、古墳周溝から五世紀後半には土師器杯、須恵器有蓋壺、土師器甕が出土、六〜七世紀には須恵器杯・壺・横瓶・長頸瓶・平瓶・甕などが出土している。これは、埼玉古墳群稲荷山古墳の造り出しの土師器・須恵器類と同様、古墳への飲食の供献を示すものと推定できる。

「おゆみ野地区」内、高沢遺跡の南約一・三kmには椎名崎古墳群の前方後円墳、人形塚古墳(墳丘全長四二・六m)が所在し、六世紀末期の人物埴輪群が出土している。埴輪には帽冠と顎鬚を付けた男子像、巫女と思われる女子像、壺を頭に捧げた女子像があり、⁽⁵³⁾五世紀後半に成立する群馬県保渡田八幡塚古墳のように、飲食供献の場面が存在した可能性が高い。⁽⁵⁴⁾

人形塚古墳は、埼玉古墳群の稲荷山古墳と同じ長方形周溝を伴い、六世紀後半、埼玉古墳群では將軍塚古墳の横穴

式石室が房総の石材を使用して築かれている。また、北武蔵の有段口縁の土師器杯も房総・相模地域には流入しており、七世紀には高沢遺跡でも確認できる。このような、武蔵と房総との交流の中で、稲荷山古墳に見られた「上祖」の意識や古墳における供献儀礼は、両地域で共有されていた可能性は高い。そして、人物埴輪に見られる飲食供献の場面と、小型古墳の周溝から出土する須恵器・土師器の杯・壺・甕等は対応関係にあると考えられ、小型古墳においても飲食を死者や祖先に供え饗応する儀礼・祭祀が存在したと考えられる。

高沢古墳群三号墳、生浜古墳群二号墳、南二重堀遺跡三号墳では、七世紀から八世紀に連続して須恵器・土師器の杯・壺が出土、さらに、高沢遺跡M〇六、生浜古墳群六号墳では、周溝から八・九世紀代の須恵器杯、灰釉陶器碗、土師器杯・皿類が出土しており、古墳への飲食供献は八・九世紀代まで行われていた可能性が高い。五世紀後半から八・九世紀代まで継続して、祖の霊を飲食で饗応する意識が存在し、それは伝統的に集落と墓域の景観の中で維持されていたのである。

五、祖の信仰と祭祀の性格

古墳時代以来の集落と墓域の景観が維持され、ここでは祖を飲食で饗応した祭祀が想定できることを、下総地域、高沢遺跡を中心に見てきたが、八世紀初頭における「祖」の祭祀をうかがわせる伝承が、同じ東国、下総国に隣接する常陸国に残されている。『常陸国風土記』筑波郡条の「神祖の尊」説話である。⁵⁵

古老のいへらく、昔、神祖(みおや)の尊、諸神たちのみ處に巡り行でまして、駿河の國福慈の岳に到りまし、卒に日暮に遇ひて、遇宿を請欲ひたまひき。此の時、福慈の神答へけらく、「新粟の初嘗して、家内諱忌せり。今

日の間は、冀はくは許し堪へじ。」とまをしき。是に、神祖の尊、恨み泣きて訾告りたまひけらく、「即ち汝が親ぞ。何ぞ宿さまく欲りせぬ。汝が居める山は、生涯の極み、冬も夏も雪ふり霜おきて、冷寒重襲り、人民登らず、飲食な奠りそ。」とのりたまひき。

更に、筑波の岳に登りまして、亦客止を請ひたまひき。此の時、筑波の神答へけらく、「今夜は新粟嘗すれども、敢へて尊旨に奉らずはあらじ。」とまをしき。爰に、飲食を設けて、敬び拝み祇み承りき。是に、神祖の尊、歛然びて訶ひたまひしく、「愛しきかも我が胤、巍きかも神宮。天地と竝齊しく、月日と共同に、人民集ひ賀ぎ、飲食豊富く、代々に絶ゆることなく、日に日に彌榮え、千秋萬歳に、遊榮窮じ。」とのりたまひき。

「神祖の尊」は「愛しきかも我が胤」と歌っており、祖先を指すことは明らかであり、「神祖の尊」は、新粟の初嘗の日の夜に訪れ、飲食を饗応され拜される存在として描かれている。また、その日には厳重な物忌が必要とされていたことが判明する。

この説話が語られた常陸国内でも、下総国の「おゆみ野地区」高沢遺跡周辺と同様、集落と墓域が隣接する景観が確認できる。『常陸国風土記』香島郡条で「卜氏がすまう所」に当たると考えられる厨台遺跡群では五世紀中頃に集落が成立、十一世紀代まで継続し、隣接する鹿島神宮の神戸集落と考えられる⁵⁶。集落西側の台地上には、宮中野古墳群が位置し、四世紀末期から五世紀初頭に前方後円墳のお伊勢山古墳・二十三夜塚古墳などで構成される南群が形成され、六世紀から七世紀にかけて北群が形成される。北群では前方後円墳の夫婦塚古墳、造り出し付き円墳の大塚古墳、長方形墳の九九号墳と継続して古墳が築かれ、大塚(勅使塚)古墳周辺には、八世紀以降、二重土坑・L字形土坑の土坑墓が多数存在し、火葬墓も確認されている。⁵⁷ 集落とそれに対応する墓域(古墳群)が古墳時代から奈良・平安時代にかけて継続して営まれていたことになる。

『常陸国風土記』筑波郡条の「神祖の尊」説話は、下総国「おゆみ野地区」高沢遺跡周辺や常陸国の厨台遺跡群と宮中野古墳群で見たように、集落と墓域が伝統的に維持された八世紀初頭に、同じ東国の中で伝承されていたのである。そして、「神祖の尊」に対する飲食饗応の要素は、「祖」の霊が所在する古墳で行われた飲食の供献と共通する。高沢古墳群では、古墳での飲食共献は、八・九世紀まで連続している一方で、『常陸国風土記』「神祖の尊」の説話では、「祖」への飲食饗応は集落内の住居と見るべきで、八世紀初頭段階、祖の祭祀の場は、古墳と住居内とが並存していたとも考えられる。南二重堀遺跡の墓域内に唯一存在する八世紀代の竪穴建物からは、饗応に相応しい大形の高杯と盤が出土しており、饗応儀礼や、その準備が行われた可能性を想定できる。

律令期の祖神の祭祀には、大嘗祭(新嘗祭)と神今食がある。これら祭祀の構造については、岡田莊司が復元・考察しており、いずれも、天皇自らが祖神をお迎えし、飲食で饗応、自らも召し上がられる。この内容は、『常陸国風土記』の「神祖の尊」が、「新粟の初嘗」の夜に訪れ饗応を受ける祭祀と同じであり、厳重な物忌が伴った点も共通する。

また、『令集解』の月次祭に関する注釈で「即如庶人宅神祭也。」とする部分は、月次祭の夜に行われる神今食に対応していると考えられ、東国の庶人も宅(家々)で宅神祭として「祖」を祭っていたことになる。⁽⁵⁸⁾

高沢遺跡と周辺の古墳群の分析からは、五世紀後半以降、居住域の単位集団(竪穴建物ブロック)と墓域は「祖」の系譜意識に基づき伝統的に受け継がれ、そこでは「祖」の祭りが行われていたと推定できた。これが、『常陸国風土記』の神祖の尊の説話に現れていたものであり、この「祖」への祭祀は、飲食の供献・饗応を重要な要素とする大嘗祭(新嘗祭)、神今食、庶人宅神祭と共通の基盤に載っていたと考えてよいだろう。

六、まとめ

これまで、「祖」の信仰と系譜について、文献史料と考古資料をもとに考えてきたが、その結果は、以下のようにまとめることができる。

◎八世紀前半の『記紀』『風土記』では、「祖」の他、「遠祖」「上祖」「始祖」「初祖」など多様な表現が確認できるが、埼玉県埼玉古墳群・稲荷山古墳群の鉄剣銘から、「上祖」が年代的に最も古く五世紀後半まで遡る。

◎五世紀後半の東国では、①「上祖」の最古の使用例の出現、②七世紀代まで継続する大規模な古墳群の成立、③八・九世紀まで継続する集落と墓域(古墳群)の景観の成立、④飲食の供献場面を表現する人物埴輪群の成立、という四つの事象が同時に確認でき、八世紀前半の文献に記された「祖・おや」の信仰と系譜意識が、おそくとも五世紀後半頃には形成されたと考えられる。

◎五世紀後半から九世紀頃まで宅(居住域・集落)と墓域(古墳群)が、ほぼ継続的に維持される例があり、集落の人々の「祖」の霊は、墓域(古墳群)内に存在すると考えられていた。

◎「祖」への祭りは、飲食の饗応が重要な要素であり、『常陸国風土記』『神祖の尊』の説話にそれが投影されていた。その淵源は、五世紀代の古墳の人物埴輪や土製模造品の饗応儀礼にあり、古墳墳丘や周溝内から出土する土師器・須恵器の杯・壺・甕類もこれに対応する。

◎「祖(おや・人に繋がる祖先)」は、貴重な品々を捧げ飲食で饗応するという、「神」と共通の方法で祭られる存在として認識されていた。

「祖」の信仰と系譜意識、そして、その祭祀において、五世紀後半という時代は、大きな画期となっていたと考えられ、それは地方豪族などの大規模な古墳群だけでなく、東国の小規模な古墳群と集落の景観にまで共通する画期と

なっていたのである。

田中良之は、古墳被葬者の遺传的形質(齒冠計測値)の分析から、被葬者の関係が五世紀後半を画期として父と子を埋葬する父系直系へと変化することを指摘する。さらに、渡来人の故地、朝鮮半島伽耶地域に所在する四・五世紀の礼安里古墳群における分析も行い、そこには父系直系の埋葬状況は認められず、日本列島における父系直系々譜の源泉を半島からの渡来人にもとめることには無理があるとし、その背景には「国家形成にむけた社会動態と中国からの国家イデオロギーの浸透」を想定している。⁵⁹この画期は、今回の分析で確認できた五世紀の画期と対応する現象と考えられる。

しかし、五世紀後半における系譜意識の形成は、高沢遺跡周辺の景観分析から明らかのように東国の集落でも逸早く確認できるため、それは政治的な要因だけでなく、新たな生活様式の形成、それに伴う集落や地域社会の再編と一体となった形で進行していたと考えられないだろうか。五世紀には、新しい製鉄や機織り技術、須恵器焼成技術の導入が行われ、カマドの導入など生活様式も大きく変化、高沢遺跡のように集落の立地と景観が変化する例は、東国においては他でも確認できる。⁶⁰五世紀代は、地域の構成単位である集落、それを構成する単位集団までが再編成される変革期であり、再編成された集落の集合体である地域社会を安定的に維持するためには、系譜意識に基づき集落や単位集団の構成員を結びつける「祖」の信仰が必要不可欠だったのである。それは、律令時代、八・九世紀まで社会の基盤として存続したため、五世紀代の記憶が、居住域や耕地を設定し、古墳に葬られた「祖」「上祖」「初祖」などの説話として各地に伝えられ、風土記に残されることになったのである。

また、「祖」と「神」とは、同じ方法で祭られたため、六・七世紀代には、両者の混同や結び付きが生じていた可能性があり、その結果、「祖」の系譜の上に神々を結びつけることが行われ、それが『記紀』に投影されたと考えら

れる。その一方で、六・七世紀の横穴式石室と結び付く「黄泉国」説話の穢れ観が影響して、記憶に新しい死者と「祖」「上祖」との分離を促進したとも考えられる。そして、居住域と墓域を代々継承する中で、「祖」の祭祀も代々継承され、死者と「祖」「上祖」との分離を経て、古代の氏神祭祀へと繋がる要素が形成されたと思われる。この点については、今後、さらなる検証を行う必要があるが、ここでは、その可能性を指摘しておきたい。

ところで、『日本書紀』推古天皇十四年(六〇六)四月八日と七月十五日の条に設齋の記事があり、七月十五日の設齋は、『佛説孟蘭盆經』の内容と一致し、七世紀初頭には、七世父母を供養する、仏教信仰の祖先供養が始められていたことが分かる。『佛説孟蘭盆經』は、自恣に僧侶へと食べ物等を供養することで、七代の父母が救われる文脈となっており、祖霊へと飲食を供献するものとは基本的に異なる。⁽⁶²⁾これに対し、九世紀初頭の仏教説話集『日本霊異記』には、諸霊への饗応と拝礼を記した説話がある。それは「人・畜に履まるる髑髏の救ひ収められ、霊しき表を示して現に報ずる縁 第十二」など複数が残されており、十二月の晦日に諸霊が子孫・遺族のもとを訪れ、飲食で饗応を受け拝されるといふ流れで語られる。祭祀の日は異なるが、『常陸国風土記』『神祖の尊』の祭祀と類似した内容である。飲食で饗応する「祖」の祭りは、仏教信仰が浸透する中でも容易に変化しなかったと思われる。

しかし、十世紀、多くの古代集落が解体・消滅し、五世紀以来の「祖」の信仰と系譜に大きな変化が生じていた可能性が高い。⁽⁶⁴⁾今回分析を行った高沢遺跡の南約八〇〇m、「おゆみ野地区」内の椎名崎遺跡では、十世紀代に古墳群の中に竪穴建物五棟が侵入して営まれ、⁽⁶⁵⁾集落と墓域の景観が大きく変化する。古墳の周溝の上に営まれた竪穴建物から、仏具の灰釉陶器浄瓶が出土していることは象徴的で、地方における「祖」の祭祀と系譜意識の変化に、八・九世紀を通じて集落内へと浸透していた仏教信仰が大きく影響していたのである。この後、十二世紀後半頃には、新たな集落・屋敷地と墓地が現れ、中世的な景観が形成される。⁽⁶⁶⁾それと並行して、その後につながる祖先・死者観が作られ

ていったと考えられる。古代的な「祖(おや)」の信仰は、死者を「仏(ほとけ)」と呼び仏教的に供養する中世的な信仰へと変貌する一方で、祖先の霊を飲食で饗応する要素は、盆行事の中に残されていたのではなからうか。この点は、稿を改め考えてみたい。

註・参考文献

- (1) 柳田国男『先祖の話』筑摩書房 一九七五
- (2) 岡田莊司編『日本神道史』吉川弘文館 二〇一〇
- (3) 大場磐雄『まつり〈解説付新装版〉』学生社 一九九六(一九六七版の再版)
- (4) 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店 一九八三
- (5) 広瀬和雄『前方後円墳国家』角川書店 二〇〇三
- (6) 梶山林継「祭と葬の分化―石製模造品を中心として―」『國學院大學日本文化研究所紀要』第二九輯 一九七二
- (7) 白石太一郎「神まつりと古墳の祭祀」―古墳出土の石製模造品を中心として―『国立歴史民俗博物館研究報告 第七集 共同研究「古代の祭祀と信仰」本編』 一九八五
- (8) 小林行雄「黄泉戸喫」『考古学集刊』第二冊 東京考古学会 一九四九
白石太一郎「ことどわたし考」『檀原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』吉川弘文館 一九七五
- (9) 註4文献に同じ。
- (10) 広瀬和雄「装飾古墳の変遷と意義」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五二集 二〇〇九

- (11) 辰巳和弘『新視点の考古学「かたち」から考える日本の「こころ」』小学館 二〇〇六
- (12) 白石太一郎「墓と他界観」『列島の古代史七 信仰と世界観』岩波書店 二〇〇六
- (13) 土生田純之『黄泉国の成立』学生社 一九九八
- (14) 奈良県広陵町教育委員会編『出島状遺構 巢山古墳調査概報』学生社 二〇〇五
- (15) 『行者塚古墳 発掘調査概報』加古川市教育委員会 一九九七
- (16) 若狭徹他編『はにわ群像を読み解く』かみつけの里博物館 二〇〇〇
- (17) 倉野憲司他校注『日本古典文学大系 古事記 祝詞』岩波書店 一九五八
- (18) 坂本太郎他校注『日本古典文学大系 日本書紀 上』岩波書店 一九六七
- (19) 本居宣長『増補本居宣長全集第一 古事記傳 神代之部』吉川弘文館 一九〇二
- (20) 田中久夫『氏神信仰と祖先祭祀』名著出版 一九九一
- (21) 秋本吉郎校注『日本古典文学大系 風土記』岩波書店 一九五八
- (22) 『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会 一九八〇
『埼玉稲荷山古墳辛亥銘鉄剣修理報告書』埼玉県教育委員会 一九八二
小川良祐他編『ワカタケル大王とその時代―埼玉稲荷山古墳』山川出版社 二〇〇三
稲荷山古墳に関する記述は、これら文献によっている。
- (23) 註22、小川良祐他編文献。
- (24) 義江明子「鉄剣銘「上祖」考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一五二集 二〇〇九
- (25) 註23に同じ。

- (26) 註23に同じ。
- (27) 笹生衛「古墳時代における祭具の再検討」『國學院大學伝統文化リサーチセンター紀要』第二号 國學院大學伝統文化リサーチセンター 二〇一〇
- (28) 『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像神社復興期成会 一九五八
『宗像沖ノ島』宗像神社復興期成会 一九七九
- (29) 『南羽鳥遺跡群Ⅲ―中軸第一遺跡F地点―』(財)印旛郡市文化財センター 一九九九
『館山市東田遺跡』(財)千葉県文化財センター 二〇〇八
- (30) 註15に同じ。
- (31) 註23文献及び、高橋一夫『埼玉古墳群 鉄剣銘一一五文字の謎に迫る』新泉社 二〇〇五
- (32) 式内社研究会編『式内社調査報告 第十一卷 東海道六』皇學館大學出版部 一九八一
- (33) 註4に同じ。
- (34) 『平成二〇年度出土遺物巡回展 房総発掘物語―おゆみ野編―』(財)千葉県教育振興財団 二〇〇八
- (35) 『千葉東南部ニュータウン一七―高沢遺跡―』(財)千葉県文化財センター 一九九〇
- (36) 『千葉東南部ニュータウン二一―千葉市有吉遺跡(第四次)・高沢古墳群―』(財)千葉県文化財センター 一九九九
- (37) 『千葉東南部ニュータウン四 生浜古墳群』(財)千葉県文化財センター 一九七七
- (38) 『千葉東南部ニュータウン一二―南二重堀遺跡―』(財)千葉県文化財センター 一九八三
- (39) 『君津地方における弥生時代後期―古墳時代前期土器の土器編年』『研究紀要Ⅶ』(財)君津郡市文化財センター 一九九六

- (40) 小沢洋 『房総古墳文化の研究』 六一書房 二〇〇八
- (41) 田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 一九八一
- (42) 後藤建一 「古墳出土須恵器にみる地域流通の解体と一元化―駿河西部域における六世紀から七世紀の古墳出土須恵器を事例として―」 『日本考古学』 第九号 日本考古学協会 二〇〇〇
- (43) 『房総における歴史時代土器の研究』 房総歴史考古学研究会 一九八七
- (44) 『千葉東南部ニュータウン一五―馬ノ口遺跡・有吉城跡・白鳥台遺跡―』 (財)千葉県文化財センター 一九八四
- (45) 『千葉東南部ニュータウン一三―上赤塚一号墳・狐塚古墳群―』 (財)千葉県文化財センター 一九八二
- (46) 『千葉東南部ニュータウン二二―鎌取場台遺跡―』 (財)千葉県文化財センター 一九九九
- (47) 註36に同じ。
- (48) 鉄鏃の年代観は、白井久美子「第四章第一節 東国後期古墳分析の視点―鉄鏃による後期古墳群の分析―」(『古墳から見た列島東縁世界の形成』 千葉大学考古学研究叢書二 二〇〇二)による。
- (49) 白石太一郎「山ノ上古墳と山ノ上碑―古墳の合葬原理をめぐって」『古墳時代の日本列島』 青木書店 二〇〇三
- (50) 田中良之は、出土人骨(主に齒冠計測値)の遺伝的形質の分析から、古墳被葬者の埋葬パターンを抽出している。古墳被葬者の関係は、モデルⅠ：同世代の血縁者・キョウダイ原理、モデルⅡ：父(家長)と子、モデルⅢ：家長夫妻と子の三パターンがあり、モデルⅡは五世紀後半、モデルⅢは六世紀前半から中頃にかけて出現するとしている。今回、分析対象とした高沢・生浜古墳群、南二重堀遺跡の古墳群は、年代的には五世紀後半から七世紀代で、モデルⅡ・Ⅲに対応し、山ノ上古墳では父と娘(黒壳刀自)が埋葬されている可能性が高いことを考え合わせると、ここでも家長を中心に古墳が営まれていたと推定できる。

田中良之「古墳時代の家族／親族／集団」『古墳時代の日本列島』青木書店 二〇〇三

(51)『新訂増補 国史大系 続日本紀 前編』

(52)『新訂増補 国史大系 日本後紀』

なお、田中久夫は、この記事に見られる氏族が何れも帰化人(渡来人)系であり、その墓地と祖先観については、渡来人との関係を想定している(註20文献)。しかし、高沢・生浜古墳群、南二重堀遺跡の古墳群に見られる墓域の景観は、この記事の「子孫相守。累世不侵」の表現と整合しており、そこに記された祖霊観も、広く敷衍させてよいと考えられる。

(53)『千葉東南部ニュータウン三五―千葉市椎名崎古墳B支群―』(財)千葉県文化財センター 二〇〇六

(54)註16に同じ。

(55)註21に同じ。

(56)笹生衛「『常陸国風土記』と古代の祭祀―考古資料から見た鹿島神宮と浮島の祭祀―」『日本考古学協会二〇一〇年度兵庫大会研究発表資料』日本考古学協会二〇一〇年度兵庫大会実行委員会 二〇一〇

(57)本田勉「第三章 考察」『大塚古墳周辺地区発掘調査報告書―鹿島浄水場拡張に伴う発掘調査―』大塚古墳・一一三号墳・大塚古墳西遺跡』(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団 一九九七

(58)岡田莊司『大嘗の祭り』学生社 一九九〇

(59)註50、田中良之論文。

(60)笹生衛「第四編第二章 地域の環境変化と祭祀」『神仏と村景観の考古学』弘文堂 二〇〇五

(61)十四年の夏四月の乙酉の朔(中略)、是年より初めて寺毎に、四月の八日・七月の十五日に設齋す。

- 坂本太郎他校注『日本古典文学大系 日本書紀 下』岩波書店 一九六五
- (62)『大正新修大藏經第十六卷經集部三』No.六八五
- (63)小泉道校注『新潮日本古典集成 日本靈異記』新潮社 一九八四
- (64)註60に同じ。
- (65)『千葉東南部ニュータウン六 椎名崎遺跡』(財)千葉県文化財センター 一九七九
- (66)笹生衛「古代集落の変化と中世的景観の形成―西上総、小糸川流域の事例を中心に―」『千葉県史研究 第一一号 別冊 中世特集号』千葉県 二〇〇三